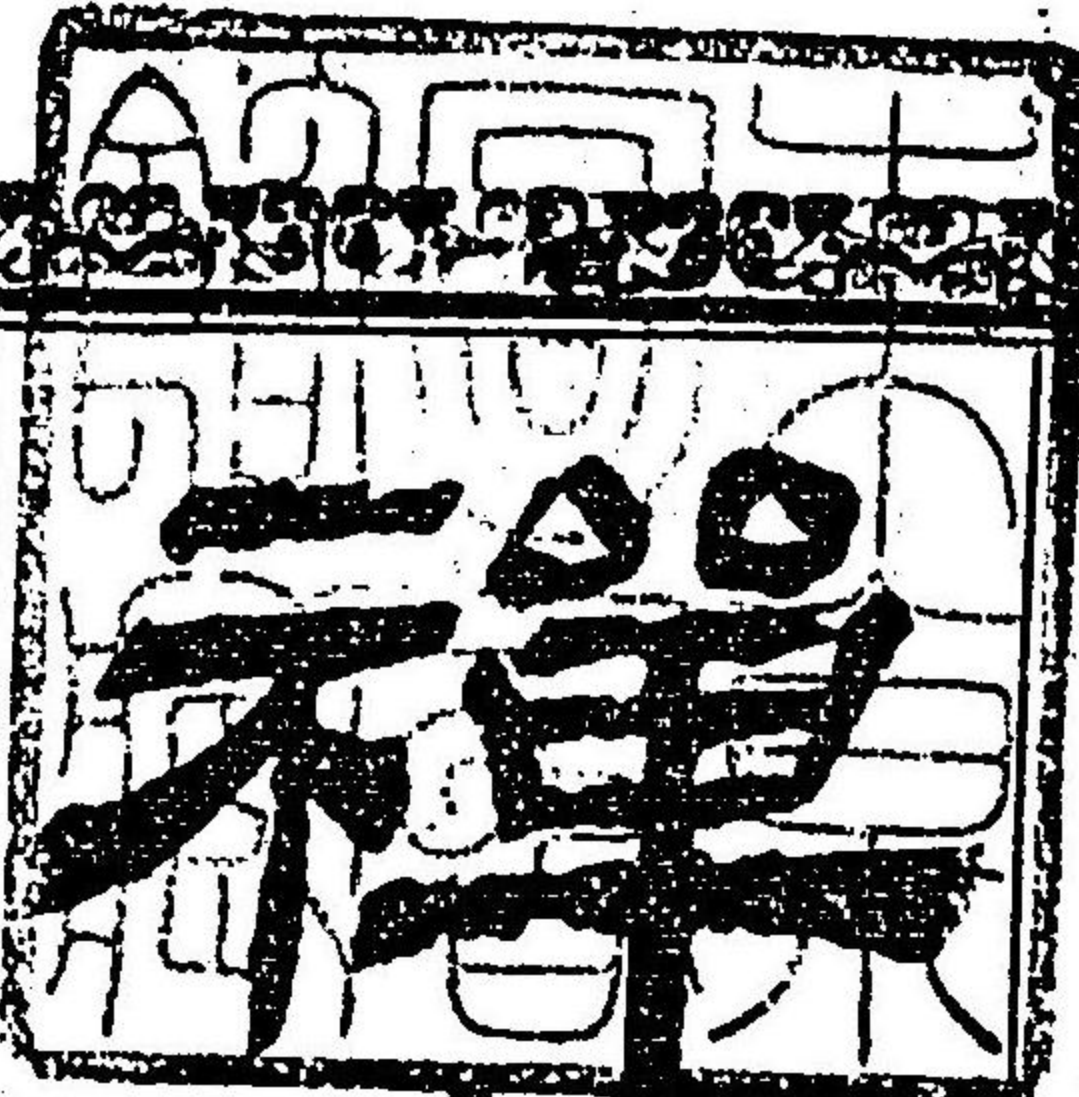


工卜35-60

40
158



禪學示範

全

如庵市川文雄師著



東京書肆

鴻盟社發行

禪學示範序

萬法由來徒有名真如即萬法萬法即真如閻
浮八萬四千城固不動干戈致大乎矣焉惟視
渾平無明一陣風平等性海起於能所濤一凸
一凹一陰一陽焉文焉彩焉主焉客紊擾乎失
於眼睛而漂溺三界游泳六趣矣也於是乎佛
來化中天笠瞰乎現大聖一握於萬法示大源
叩訪於大源示方法假橋設梯親醫盲眼隱火
與水巧度群生其跡提々焉五千赤軸八万四
千法門矣橋梯元是假設在大道何處乎大道

非在非非在敢道麻三斤乾屎橛離方處絕語
默弟子未到而橋已無用梯已無用竟拈干婆
羅華而囑於迦葉焉元來是閻浮之一波瀾而
已執之者凡知之者聖迦文之本旨存乎茲禪
門之大義不出乎之也然墻外偷聞之判而想
像之摘而誤味之吼々訛擬失珠得瓦弄言失
眞呼至嘆哉比得寸暇便敢不揣綴蕪言聊欲
以焉盲杖之便也蓋亦徒動干戈者乎咄欲得
則道益遠

明治廿八末一月於又玄閣 如庵 市川文雄述

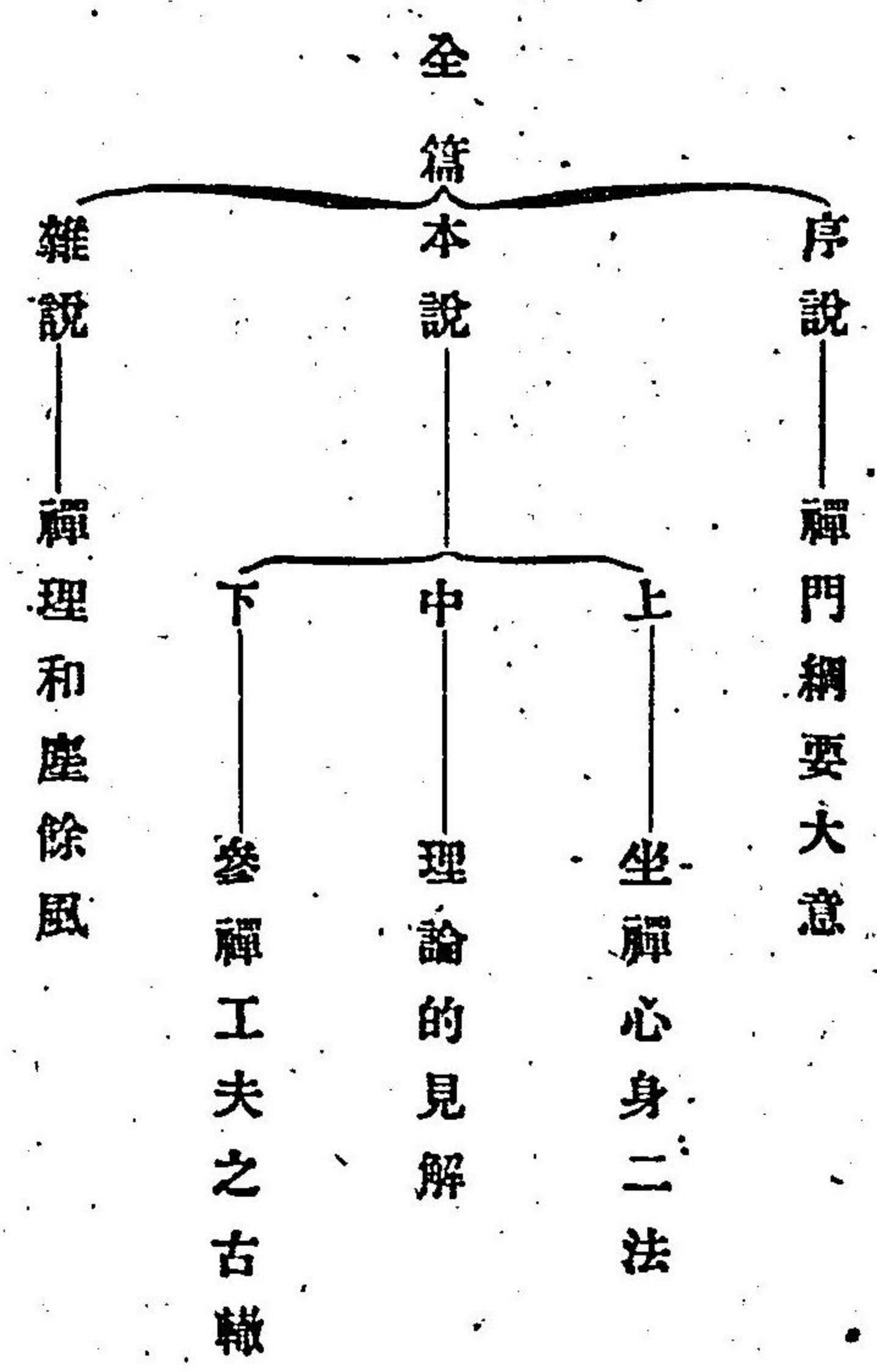
○凡 例

- 一 本書題以禪學示範之名スルニ教ヲ未レ知ニ禪之何カ者ヲ窺シ其ノ一斑ニ已矣敢不レ當レ盡ス於禪門之面目也
- 一 本書全篇分爲三區曰序說曰本說曰雜說是也序說說其綱要本說演其全局雜說補其風餘而本說更分爲上中下三上ハ明カ坐シ禪心身二法中說禪門理論之楷梯下錄參禪工夫之古轍
- 一 著者淺學不才文字不當句不傳意加之繁務際校訂不得盡詳細乞讀者幸諒之而判採於其旨

明治廿有八年一月

著 者 識

禪學示範 要目次



一 序 説

宗因、拈華微笑、傳法傳衣、唯佛與佛之內証、傳燈、五家七宗、黃蘗宗祖、臨濟宗祖、曹洞宗祖、禪家と教家、佛語と佛心、禪門所依、三佛之教法、釋迦教、彌陀教、大日教、佛之三德、大定德、大智德、大悲德、佛心宗、心印、如來禪、無念無心は灰身滅智に非ず、一切空は一切有を攝す、本具の佛心、本來固有に還元す、妄想煩悩退消すると同時に四智圓滿の光明と放つ、宗乘の奥要

一本説上

坐禪方法、坐禪心法、普賢の境、大死底、大悟大徹、善惡念、無記心、打成一片、一色邊、見性成佛、法界平等一枚、入道要條、心法本体、契悟は無所得を要す、悟道は身口意の三業を以て得べからず、祖師の教句、坐禪の主觀的解義、坐禪病、坐禪のとき睡眠防排法、坐より起つ法方、宗師の活手段、禪は法界定印に限らず、行住坐臥の坐禪、凡夫の心念、諸佛不動智、應無所住而生其心、坐禪工夫、奥要、工夫の解、万事の中の工夫、工夫の中の万事、無工夫の工夫、無用心の用心、坐禪身法、肉身の要件、資給、保護、飲食と運動とが直に此身体なり、活力の保護、坐禪身法は

一本説中

心法を標準とす、注意すべき件、食、飽食と限少食、一食、酒、肉食、葱蒜類、三不足、雜件

大解脱の法門、禪門之理論、知とは何ぞや、相對と現象、衆生界の状态、安心、生あるもの終局の目的、相對は世界の性質、宗教、教外別傳宗門、夢幻と醒覺、眞正理眼、世界は是れ吾人の觀念、實物、知得も亦吾人の所感に過ぎず、森羅万象唯識所變、唯心第一義、物心、宇宙二元論、本心、宇宙の大源本極、唯心第一義、三界唯一心、一切唯心造、解脫之義、坐禪工夫の力、坐禪理論、無明漆桶、久劫習氣、方法即真、真如即方法、大悟佛心に三徳四智を有する所以、坐禪の重要なる所以、厭世教に非ず、宗乘の奥要は衆生濟度拔、若與樂にあり、三身、法身、報身、應身、自性身、受用身、變化身、四智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智、世を離れて佛教なく有爲を離れて禪門なし、佛心印、眞理の賊、佛祖機縁、以心傳心、只管打坐身心脱落、

一本説下

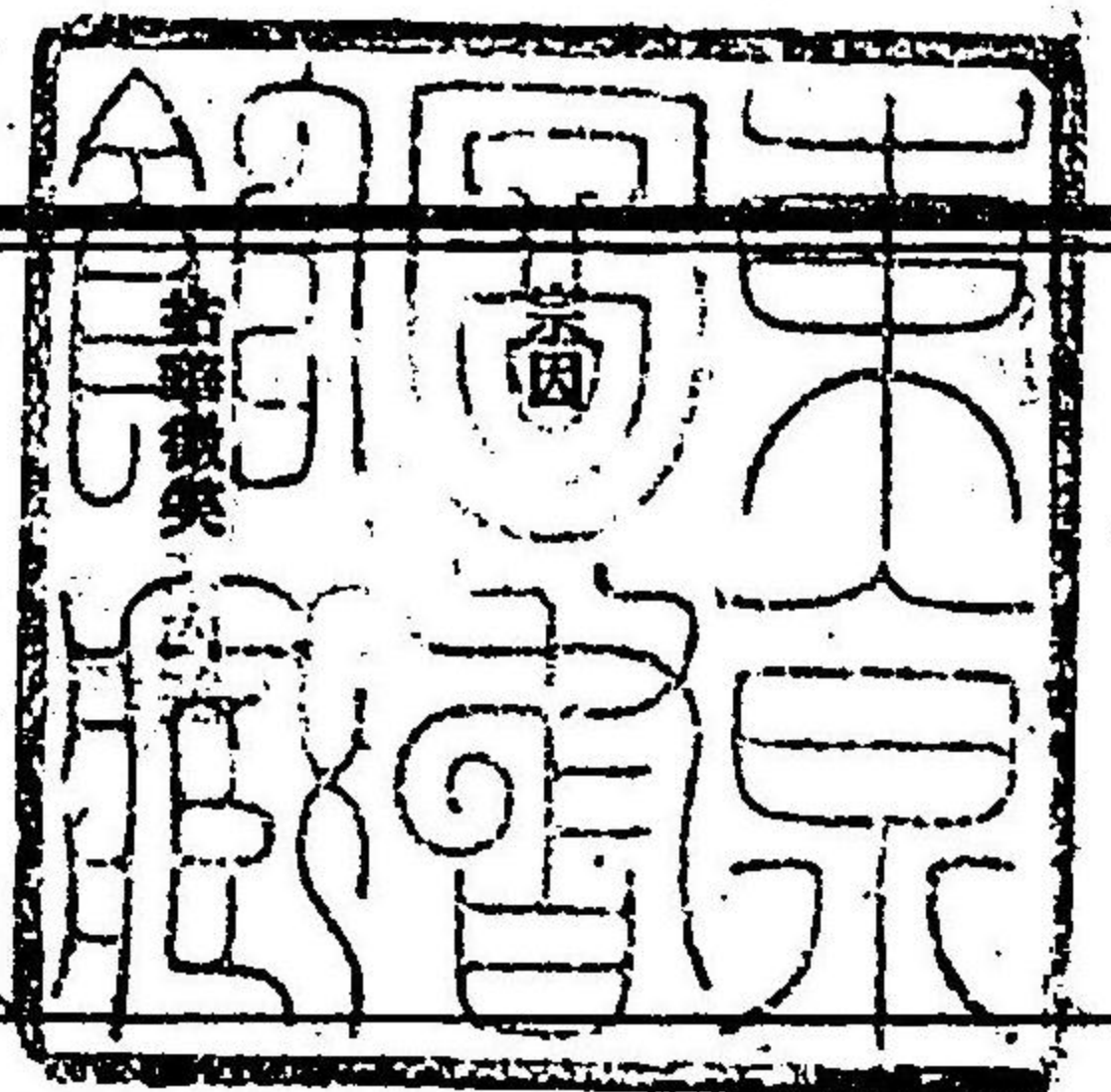
參禪、公案、句に參すること、意に參すること、學道修業の要訣、無門禪

師の手裡活鞭	
第一則 趙州狗子話	第二則 百丈野狐話
第三則 俱胝豎指話	第四則 世尊拈華
第五則 州勘庵主話	第六則 岩喚主人話
第七則 洞山三頓棒	第八則 洞山麻三斤
第九則 松原大力量人	第十則 雲門乾屎橛
第十一則 迦葉刹竿話	第十二則 不思善惡
第十三則 離却語言	第十四則 三座說法
第十五則 不是心佛	第十六則 久響龍潭
第十七則 非風非幡	第十八則 即心即佛
第十九則 外道問佛	第二十則 非心非佛
第二十一則 智不是道	第二十二則 路逢達道
第二十三則 洞庭前栢樹子	第二十四則 達磨安心
第二十五則 首山竹篋	

一 雜 說

開悟成佛、不動智、歌俳諧と禪、詩文全一、
膽力と禪、
擊劍と禪、
美術と禪、
武勇と禪、
眞理と禪、
哲學と禪、

目 次 了



禪學示範

如庵 市川文雄 著

序 說

今は昔釋迦牟尼佛靈山會上に於て 金色の波羅華を拈して大衆に示すに 人天百万悉皆措くことなかりき 獨り摩訶迦葉あり其玄旨を了悟して破顔微笑せり 乃佛曰く 吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり 悉く摩訶迦葉に附屬すと 是蓋も

禪てふ一派の宗因なり

(備考) 大梵天王問佛決疑經に曰く 梵王靈山會上に至り 金色の波羅華を以て佛に献じ 請て群生の爲に說法せしむ 世尊座に登り華を拈して衆に示す 人天百万悉皆措くことなし 獨り金色の

傳法
傳衣

唯佛與佛之內証

頭陀あり破顔微笑す。佛曰く吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり。摩訶迦葉に分附す。汝當に護持して斷絶せしむるを勿るべし。人乃偈を説き曰く。法の本法は法無し。法無きの法亦法なり。今無法を付する時法々何る曾て法ならん。併て金襴の袈裟を授く云々。

悟覺の極致なり

準次展傳して五家七宗を爲せりと雖、其傳ふる所に至りては、皆貫一にして靈明會上の佛の直心印ならざるは莫し。

- (備考) 第一祖迦葉 二阿難 三商那和修 四優婆塞多 五提多迦
 六彌遮迦 七婆須密多 八佛陀難提 九伏駄密多 十婆栗濕縛
 十一富那夜奢 十二馬鳴 十三迦毘摩羅 十四龍樹 十五迦那
 十六羅睺羅 十七付迦難提 十八伽耶舍多 十九鳩摩羅

五家七宗

黃檗宗祖

臨濟宗祖

曹洞宗祖

禪家
教法
佛語

多二十開夜多 廿一婆修槃頭 廿二摩拏羅 廿三鶴勒那 廿四師子 廿五婆舍斯多 廿六不如密多 廿七般若多羅 廿八達磨以上を印度傳燈とす。廿八祖達磨支那に入り法を慧可に傳ふ。次下五傳して弘忍に至り南北二派をなし遂て五家七宗をなす左の如し。

六神秀

○弘忍

六慧能

- 南嶽馬祖 百丈黃檗 臨濟
 青原石頭藥山雲巖洞山 曹洞宗祖

五家とは鴻仰宗臨濟宗曹洞宗雲門宗法眼宗是あり。之に楊岐宗黃龍宗を加ふれば七宗となる。

佛固より攝化の爲めの故に万緒の言説あり。斯の佛語に依て信入する之を教法と名く。之に對して此を教外別傳の禪家を謂ふ。蓋し禪家は文言に依らず直ちに其心印を提指するものなればなり。宜に知

るべし

禪家は佛語に依らずして直に佛心に因るものなることを然り而して彼の八万四千の佛語五千餘卷の言説其歸する所は唯是れ佛心にして他事なし而も是の佛心之を演ぶれば亦八万四千の佛語五千餘卷の言説にして他事なし

佛語佛心兩にして而も二ならず

一と爲し二と爲す皆過てり彼の猶脩身の學衛生の學治國の學等其由て然る所以を原ねれば是れ唯だ一の實利に歸して他事なし而も是の實利之を演ぶれば脩身衛生治國等其のものに外あらざるが如し興禪護國論に曰く興へて之を論ずれば一代藏經皆是れ所依あり一書あて之を論ずれば一言の所依なしとされば禪門の直に佛心に是れ依ると雖教家に背せず教家は其佛語に是れ依ると雖亦禪家に背せず禪家教家を通じて當に是れ一の

佛教あり宗門無盡燈論に曰く今時往々沒智意を以て禪となして經論を用ひず却て道外教外別傳と殊に知らず教外分明ならば教内何ぞ妨げん教外もし教を容れずんば教外も亦眞にあらずと

佛語と佛心夫れ斯の如く禪家と教家夫れ斯の如しと雖道に入らんとするや必ず其途あり殊に人々其根機の淺深高底の差別あるを以ての故に其數途あるや勢ひ當に然るべきのみ是れ其歸違一なりと雖其法門縱橫多端ある所以あり教家に其途を執るものは正さに是に依りて信入以て佛心に契ふべく禪家に其途を執るもの正さに是に因りて悟入以て佛語を了すべし夫現存の佛教は三佛の教法を以て成る曰く

- 一、釋迦教
- 二、彌陀教
- 三、大日教

彌陀教

大日教

佛の三徳

大定徳

大智徳

大悲徳

是なり 釋迦教とは 人々本來固有の徳性を啓發して 無上正眞道の悟を開くを教ふるものにして 彌陀教は 自力を捨て専ら佛大悲の本願に歸依して 其佛土に往生し 其土に於て彌陀同躰の悟を開くことを教へ 大日教は 秘密の作法に由りて即身成佛せしむと説く 此の三教其差別此の如しと雖 是れ一の佛心なるのみ 皆是れ佛心に該具せる三徳より流出す 三徳とは

- 一、定徳
- 二、智徳
- 三、悲徳

是れなり 所謂秘密の作法に由り即身成佛せしむるは 是れ大定徳あり 人々固有の徳性を啓發し 迷を轉して悟を得るは 是れ大智徳なり 大悲の旨に依り佛陀の本願力に依託するは 是れ大悲徳なり 斯の三徳は 佛の當躰にして人々本具固有の徳性なり 一超直入之

法門

佛心宗

適々相附の心印

如來禪

凡夫禪

小乘禪

大乘禪

最上乘禪

如來淨清禪

一行三昧

眞如三昧

無念無は灰身滅智にあらす 一切空は一切實有を攝す

を啓發するの法門 是を坐禪と謂ふ 此の端的を單傳するもの 是れ佛心宗にして 我が門適々相附の心印即是なり 徒だ是れ禪宗と言ふ 豈六度中の禪那にあらんや 吾所謂禪は一超直入の最上如來禪なり 禪源集に曰く 異計を帯び上を欣び下を厭て修するは是れ外道禪なり 正に因果を信じ 亦欣厭を以て修するは 是れ凡夫禪あり 我空偏眞の理を悟て修するは 是れ小乘禪なり 我法二空所顯の眞理を悟て修するは 是れ大乘禪なり 頓に自心本來清淨 元と煩悩なく無漏智性本と自ら具足す 此心即佛にして 異竟無異と悟りて修するは 是れ最上乘禪あり 亦如來淨清禪と名け亦一行三昧と名け亦眞如三昧と名く云々 楞伽經に曰く 云何なるか如來禪 謂く如來地に入り自覺聖智相の三種の樂性を 得て 衆生不思議の事を成辨す 是を如來禪と曰ふ云々 故に坐禪工夫 無心無念を至要とすと雖 灰身滅智の謂に非ず 悟りの要條は一切空なりと雖 周ねく實有を攝じて斷無の見に非ず

本具の佛心

本來固有に還元す

愚眼の喩

人々本具の佛心は不生不滅にして歷劫坦然として變色なしと雖も妄
 心迷念の爲めに掩蔽せらるゝか故に坐禪工夫の力に由て其妄心
 を拂ひ其迷念を退く而ち之の心無く之の念無きを要すと雖も是れ
 固有の本源に還るのみ未だ宗乗の奥要に非ざるなり又人等本具
 の佛心は靈々煥々四智圓滿せりと雖も着有法執の縛索に由て六趣
 の迷界に沈淪するが故に坐禪工夫の力に由て五蘊皆空の悟達に
 契當す而ち一切空の觀破を要すと雖も是れ所縛の魔業を離却せ
 じのみ本來固有は還元せしのみ未だ宗乗の奥要に非ざるなり只
 是れ無心無念只是れ空認斯の如きは所謂二乗の灰身滅智外道の
 斷見と一步を違へざるなり豈至道と謂ふを得んや
 彼の眼を患ふるものは其疾の爲めに正視を失ふて空華を幻見す
 空華を厭ふて閉目し若しくは其眼珠を棄却せんか空華を視すと雖
 其疾を免るべからず妄想煩腦を厭ふて世を避け閑處に通れて
 只是れ無念無心ならんことを欲して灰身滅智す妄想煩腦を見ずと

妄想煩腦退消すると同時に四智圓滿の光明を放つ

宗乗の奥要

坐禪之方法
坐禪之心法

雖豈之を佛と謂はんや若し患者良醫に依り之を治療せば疾去て
 空華を視ざると同時にかのづから晰々たる明視力を得べし學道の
 こと亦斯の如し妄想煩腦の雲霧退消すると同時に靈々煥々たる
 四智圓滿の月輪は四維上下に其光明を放つべし是れ最上乘如来
 禪あり是れ所謂

宗乗の奥要なり

本説 (上)

兌風飄々として玄空一圓の玉兔を懸けたるあるや將た西林寂と
 して惟黄鹿微かに吻々たるあるや之れ吾が知る所にあらず只管
 に床に面して結跏趺坐を乃先づ右の足を以て左の脛の上に安んじ
 左の足を右の脛の上に安んじ左の足を以て右の足を厭せ次に右
 の手を以て左の足の上に安んじ左の掌を右の掌の上に安んず斯
 の如く法界定印を結び畢て半身正しく直据の姿勢をなし鼻孔と

臍と相對し 耳朶肩に直下向し 眼を開くこと半ばにす 身心其の
まゝにして動せず 一切の想念をなさず

(備考) 普勸坐禪儀に曰く 謂る結跏趺坐は 先づ右の足を以て
左の脛の上に安んじ 左の足を以て右の脛の上に安んず 半跏趺
坐は 但だ左足を以て右の脛を厭すなり 寛く衣帶を繋けて齊整な
らしむべし 次に右の手を左の足の上に安んじ 左の掌を右の掌の上
に安んず 兩大拇指面へて相拄ふ乃ち正身端坐して 左に側ち右に
傾き前に躬り後に仰くことを得ざれ 耳と肩と對し 鼻と臍と對
せしめんことを要す 舌は上脰に掛けて唇齒相ひ着け 目は須く開
くべし云々

斯の如くして 一切外界の刺戟を容れず 一切内界の浪波を受けず
無念無心茫乎たるのとき 漸くにして雲去き風消へ 識らず湛々
として 心かのづから明鏡の如し 是れ正に普賢の境にして所謂

大死底

普賢の境

大死底

一 淨
二 三昧
三 大寂
四 大悟

なり 然れども 猶是れ阿頼耶識の暗屈裏なるのみ 更に一鞭を加
へて百尺竿頭に尙一步を進む 機熟して 無始劫來の無明漆桶を打
破し得んとき 身を三千大千世界に踊らして 三世一切の諸佛に照
見し 釋迦達磨の骨髓を知り 一切衆生の本性を見 天地万物の根
源に徹す 是れ即ち

大悟大徹

なり

(備考) 鐵眼禪師の假名法語に曰く 大眞實の信を起して 坐禪工
夫をなすとき 其心の内に善惡無記の三性の品起る 善といふは
よきことをおもふ心 惡といふは あしきことをおもふ心 無
記といふは 善にもあらず惡にもあらず 茫然としてうか／＼と
したる心なり 此の三品の念おこりて停むことなし 或は惡しき
ことをおもわざれば善事をおもふ 善事を思はざれば惡事をおもふ
もしすこしの間など 善念も惡念もおこらざれば 無記とてうか

大悟大徹

善念
惡念
無記

くとしてあるものなり
 かやうに善悪無記の、うちをはなれざる間は、いまだ坐禪の熱せざ
 る初心の人の、ありさまなり。かゝる念のおこる取も、かまわず、い
 よく、こゝろざしを深くして、退屈の心なく、ひたと坐禪するど
 きは、坐禪の心ちを熱して時として、善念もおこらず悪念も亦お
 こらず、うか／＼としたる無記のこゝろにてもなくして、その心
 すみわたり、とぎ立たる鏡のごとく、すみわたれる水のごとくな
 る心、すこしの間生することあり。これは坐禪のこゝろもち露ほ
 ど、あらわれたる、しるしなり。かやうのことあらんときは、いよいよ
 よす、みて坐禪すべし。ひたと怠らず坐禪すれば、はじめは、しば
 らくの間すみたる心になりたるが、漸々に、すみわたりて、坐禪の
 うち三分の一、すじこともあり、あるひは三分の二、すじこともあり
 であるひは、はじめ、おほり、すみわたりて、善悪の念もおこらず、無
 記のこゝろにも、あらず、はれたる秋の、そらの如く、とぎたてたる

打成一片
 一色透

鏡と、うてなは、のせたるが如く、心虚空に、ひとしくして、法界ひねの
 うちにあるが如く、おぼれて、その、ひねのうちの、すしきこと、た
 どねて、いさへきやふもなく、おぼゆることあり。
 これは、はや坐禪を過半成就せるすがたあり。これを禪宗にては打
 成一片といひ、または大死底の人ともいひ、一色透といひ、普賢の境
 界ともいふ。もし修行の人、此處にもきつきなを、いよ／＼精をい
 だして修行すべし。やがて、まことの悟のあらわるべき前相あり。
 またまは夜をあけて日のいまだ出ざる時の如し。夜のやみはれぬ
 れとも、いかなる仔細にて、かやうに聞はれて世界みあ、あきらかに、
 かなたなるやを知らず。もし此やみはれたるを見て、はやこゝろ成就
 じたりきて、さしおかば、日輪をみることを能ひじ。もし妄想のやみ、
 はれて、ひねのうちの、あきらかに、すみわたりたるを見つけて、も
 はや、さとりたりと思ひて、さしおかば、般若の日輪は、見ること能は
 じ。妄想のやみは、はれぬれども、いまだその處にては、なきぞと心

見性成佛

得てすでおきもせず、またよろこびもせず、さとりとまつ心もな
く、たゞ無念無心にして、ひたどつとめゆかば、忽然として眞實の
さとりあらわれて、萬法をてらすとも、百千の日輪の一度は、いで
たるが如し。これを見性成佛といふ。云々。坐禪論に曰く、是
坐禪論に曰く、妄見皆盡くれば、大夢俄に覺め佛性を知見す。是
を大悟大徹と名く。是の時に至りて三界は大夢なることを知り、法界の平等一枚ある、こ
とを覺了すべし。楞嚴經に曰く、淨極りて光り通達す、寂照にし
て虚空を含む。歸り來りて世間を觀れば、猶ほ夢中の事の如し。云
々。又圓覺經に曰く、始めて知る衆生本來成佛、生死涅槃猶
ほ昨夢の如し。云々。蓋も道に至るの要條は、揀擇なく憎愛なきこと是なり。禪者無念無
心なるときは、即ち以て道に至るべしと雖、方めて其無念無心なら
んことを要するときは、即ち是れ彼を棄て、此を取らんとするあり

三界大夢
法界平等一枚

道に入るの要條

心法の本體

彼を厭ふて此を樂ふものなり。斯の如くんば恰も一波を消さんと
するに一波を以てするに等しくして、到底其の平湛を期すべからざ
るあり。坐禪論に曰く、煩悩を厭わす只だ心を淨むべし。云々。||
|| 又曰く || 一念不生は

心法の本體あり

念を止むるに非ず。念を止めざるに非ず。但だ是れ一念不生なり
云々。

學道者、苟も悟を求めんと欲し、有所得の念を以て打坐せんに、は
百千万劫を経ると雖、却て益々道に遠さかるものなることを記せざ
るべからず。故に無行經に曰く、若し人菩提を求むれば、則ち是の
人には菩提なし。もし菩提の相を見れば、是れ則ち菩提に遠さかるな
り。云々。又七朝國師曰く、動むれば則ち二乘外道の道に入
り、怠れば則ち凡夫の境に墮す。と。實に悟道は、身を以ても得
べからず。語を以ても得べからず。意を以ても得べからざるなり。

契符は無所得ならんことを要す

悟道は身口意の三業を以て得べからず

然らば如何にして可ならん乎「曰く悟を求むるを須むず。須らく一切の見を息むべし。一切の見を息めんと欲せば一切の見を息むるを勿れ。得失是非只推だ之を受くること勿れ。達磨宗祖曰く外か諸縁を逐はず。内心喘々ことなく。心牆壁の如くなれば。以て道に入る可し。」

六祖祖經に曰く「外か一切善惡の境に於て心念起らざるを名けて坐禪と爲し、内ち自性を見て動せざるを禪と爲す。」云々

坐禪のとき心若し或は沈むか如く、或は浮むが如く、或は朦朧なるが如く、或は銳利なるが如きは、皆是れ念息調はざるの疾病(心病)なり。斯の如きことあらば、宜さに息を調へ、一呼一吸極めて平穩にし、心を鼻端もしくは臍下丹田(臍下寸五分の處を丹田と云ふ)安んずべし。坐禪のとき若し睡眠を催すことあらば、目を張り身を搖かし長大

一呼吸し更に息を調ふべし。若し睡昏甚したときは、坐を起て徐々緩歩を試むべし。(是れ即經行と謂へるものにして、姿勢を正し、手を按じ、一呼吸一步、靜穩にして動せざるが如く、徐歩す)若し猶ほ未だ醒めざるときは、洗面水浴讀經等種々方便して聊も昏睡すること勿れ。坐より起たんとするときは、先づ両手を兩脛の上に仰安し、両手互ひに按撫し又脛を撫し、口を開き、氣を吐き、両手を伸べて地と擦へ、軽く靜かに坐を起て徐々に行歩す。若し急卒に之を爲せば必ず害あり。以上は是れ坐禪の正規要術なりしかれども、正しく至道に合はんと欲せば、須く其師の活示治を待たざるべからず。夢者は夢外を知らず、未得の學者みづから其正路を擇ばんとするも、豈得べんや。苟も宗師たるもの、手裏には、學道者の根機業地に應じて矯治すること、尺蠖の其身を其葉狀に應じて蠶食するが如きの

活手段を有す

されば所得を求めて 汲々たるの學道者も 墮塵を惡みて 恐々たるの學道者も 此の手裏の下には 雪氷霰雹の等しく流水と 歸するが如く 引導同化せらるべし

禪は法界定印に限らず

又禪は 面床打坐法界定印を結ぶときのみに限るにあらず 行住坐臥執業談話の處 悉是れ坐禪の修行場なり 故に坐禪工夫と謂ふ工夫とは只管に其道を勤め 朝より夕と怠らざるの謂なり 歩行にも 談話にも 亦勞動にも 心は一提の公案に歸し若くは不動に住し 其歩行其談話其勞動 敢て障妨する所なし 是れ行住坐臥の坐禪なり 然れども凡夫の心念は 移々として炎焰の如く亦觸に似たり 觸るゝ所に移動し至る所に粘着す 行住のときは 心念行住に粘着し 坐臥のときは 心念坐臥に粘着し 粘着すべからずとすれば 則ち亦粘着せざると云ふに粘着す 是を以て 右に粘着するときは左を忘棄し 前に粘着するときは 後を忘棄し 惟觸るゝ所に

行住坐臥の坐禪

凡夫の心念

諸佛の不動智 應無所住而生其心

坐禪工夫の奥要 工夫の解

隨て固執す 念々安ぞ靜定するを得べけんや 視るときは色に心を奪はれ 聞くとたは聲に心を奪はれ 乃至坐禪のときは坐禪に心を奪はれ 或は心に心を奪はれ 六窓一猿瞬時と雖止むときなし 故に靈性益味く月光愈隱る 學道者宜に是の心の不移不動を勤むべし 是の心不動にして而も事々妨けず 歩行のときは是れ歩行し 喫喰のときは是れ喫喰す 是を諸佛の不動智と云 如何にせば果して斯の如くなる 金剛經に曰く

應に住する所無くして而も其心を生ずべし

と 是れ坐禪工夫の奥要なり 夢中問答に曰く 工夫と申す事は 唐土の世俗のことばあり 日本にいとまといへる語に同じいとまは、い。ま。な。り。一切のしわざに通せり 耕作は農人の工夫あり 造作は番匠の工夫なり かやうの俗語に寄せて 道人の佛法を行するを工夫と名けたり 本分の工夫をなす人 万事の中か 工夫の中かと へだつべきことなし 然れども初心の學者についてしは

らくかやうの義あり 向道の志のあさき人は 世間の万事を正とし
て 其の中に時を定めて坐禪するを日課とせり 今の叢林に叢林は
専門の道場四時の坐禪と申すも 二百年より以來此の式を始めたり
上古は禪僧とて 或は樹下石上に居し 或は叢林に首をあつめし
人 皆此の一大事のためなりき 故に各寝食を忘れて二六時中

工夫からざる時節あり

未代にきれる故に 一大事のためとは稱すれども 父母の命により
て心あらず僧形になれる人もあり 或は世間に走れば心苦しきこと
を遅れんために 寺に入れる人もあり かやうの人どもは まちや
かなる道心もなき故に 飯を食し茶を飲むときは 食欲に障へられ
て工夫を忘れ 經を讀み呪を誦するときは 事の行に心を奪はれて
本分に背きぬ かやうの人の爲に方便を設けて 四時の坐禪とて規
式を定めたり 四時の外には工夫を停めよと云ふには非ず されば
實に道心ある人は 今は坐禪の時ならずとて 徒に光陰をわたる事

万事の中の工夫

工夫の中の万事

無工夫の工夫

無用心の用心

坐禪身法

あるべからず 喫飯著衣一切の所作所爲の處 衆に交りて禮ををし
人に對して物語りする時も 本分の工夫を忘れざる人あり かやう
なる人をは 万事の中に工夫をなす人と申すべし これは万事を正
として其中に時を定め 坐禪する人よりもまされりと雖 いかにも
万事と工夫と差別せる故に やゝもすれば万事に奪われて工夫を忘
るゝことあるべし 是れ蓋し心外に万法を見る故なり 古人の云山
河大地森羅万象悉く是れ自己なりと 若し能く此旨を了すれば工夫
の外に万事なし 工夫の中に衣服を着し 飯を食し 工夫の中に行
住坐臥し 工夫の中に見聞覺知し 工夫の中に喜怒哀樂す 若し善
く斯の如ければ 工夫の中に万事をなす人と謂べし 是れ則無工夫
の工夫無用心の用心なり 云々

上來説き來れる所は是れ坐禪の心法たり 吾人は身心の二を以て成
るが故に 學道の法亦其肉身に及ぼすや明なり 次下其身法に就き
注意の一斑を述べんとす

肉身の要件

資給
保護

凡る肉身の要件は

資給と保護

との二を出てす 甲は肉身の營養を供給することにして 乙は肉身の活力を維持する方たり 而して其方法の主なるものは 資給にありては飲食にして 保護にありては 呼吸運動及種々の防害法(衣服、住居等なりとす 運動は新陳代謝の活動なりと雖も 寧ろ營養消耗の作動なりと謂べし 故に飲食と運動とは

十一 呼吸 十二 營養

數學上の所謂正負の關係をなすが故に 互ひに正比例の權衡を有すべきこと言を待たず 畢竟するに 此身は飲食と運動との權衡を以て生命となすものたり 約言せば

飲食と運動とが直に此身體なり

何となれば 此身は供給と消費との流運轉變せる新陳代謝の一現象に過ぎざればあり 是の故に此身ある以上は 運動せざるべからず

飲食と運動とが直に此身體なり

活力の保護

資給せざるべからず 之を要するに飲食と運動との權衡正比と失はされば 肉身の活力を失ふべきものにあらず 疾病の生ずる多分の原因も 飲食と運動との權衡宜しきを得ざるに由る 斯の如く肉身の活力は資給と運動とに由りて完ふすべければ 之に隨ふ第二の要件は

其活力の保護なり

保護は 此の身の外物に觸接するに當り 來害の防禦及び新陳代謝作用の助力あり 其箇々詳細なる講究は 専門斯學の方局に求めざるべからず 然れども殊に注意を要することは 心身相關の理に據し 坐禪心法を標準とし 之を反背せざることは是なり されば肉跡をのみ主として考究する衛生學とは 少しく其考査の趣を異にせざるべからず

今略して注意すべき一二の 重なる点を掲げんに 坐禪打坐と專修するものは 運動極めて緩少なるが故に 飲食も亦極めて減少せざるべからず

坐禪心法は坐禪心法を標準とす

注意すべき件々

るべからず。然れども運動は生命の一分ありとせば、敢て適宜の運動を爲さんふとを要す。又飲食法に於ては、其食量は適宜にして過不及の患なく、其食品は消化し易かるべきは勿論其刺激性ならざるを要す。其食時に於ては一定して且つ頻數ならざるを要す。呼吸法は、其調度の緩和にして深遠ならんことを要し、運動法は肢体平均等一の動程にして急激ならざるを要す。沐浴衣服等は、習慣の力に依由して、氣候の變遷大暑大寒等に、及び得るだけの抵抗力を養成すべし。其細密なることは、他日之を專述せんことを期して、今は其大要に筆を擱く。

食とは如何

飽食と限少食

(備考) 梵摩難國王經に曰く——食は體は人身の病あつて、藥を服し、其れをして癒ゆさしむるが如し。貪着することを得ざれ——増一阿含經に曰く——過分の飽食は、氣急に身滿て、百脉不調なり。心をして塞塞せしめ坐臥安からず。若し限少食なれば身羸れ、心懸として意慮固あること無し。云々——蘇悉底經に曰く——一

一食

酒

肉食

葱蒜類

三不足

雜件

日に一食す、再食することを得ざれ、斷食することを得ざれ、食に於て疑あれは、かゝらず食ふべからず。云々——涅槃經に曰く——酒は不善諸惡の根本たり。若し克く除斷すれば、則ち衆罪を遠ざかる。云々——楞伽經に曰く——無量の因縁ありとも肉を食すべからず。云々——又一切の葱薤韭蒜臭穢不淨にして能く聖道を障ふ。云々——又曰く——是の五種の辛は熱して食へば煙を發し、生なましきに食へば患を増す。云々——坐禪用心記に曰く——垢衣と舊衣とは浣洗補治して垢膩を去り、淨潔ならしめて着用すべし。垢膩を去らざれば身冷て病を發す。又障道の因縁たればあり。身命を管せずと雖も、衣の不足、食の不足、眠の不足、是を三不足と名けて皆退惰の因縁なり。一切の生物、堅物、乃至損物、不淨の食皆食ふべからず。腹中鳴動し身心熱惱して、打坐に煩あり。一切の美食耽着すべからず。但だ身心煩あるのみに非ず、貪念未だ免れざる所なり。食はたゞ氣を支るに取て、味を嗜むべからず。

らず。或は飽食して打坐すれば發病の因縁なり。大小の食後転すく坐することを得ざれば、暫く少時を経て、乃坐す可きに堪たり云々。又曰く凡る坐禪の時、牆壁禪椅及び屏風等に靠倚すべからず。又風の烈しき處に當て打坐すること勿れ。高顯の處に登て打坐すること勿れ云々。

本説 (中)

大覺禪師の坐禪論に曰く——夫れ坐禪は

大解脱之法門

なり云々——と。ろも解脱とは如何なる義なるや乞ふ。聊か之を道はん。凡る我か一切の所知所見は、相對界にあらざれば成立すべからざるものにして、知るとは、相對に因て起る必然の事情なり。而して相對は現象の性質なるか故に、現象として相對あらざるは莫く、相對

大解脱の法門

禪門の理論

知とは何ぞや

相對と現象

衆生界の狀態

として知るべからざるもの無し。其知る所以のものは何ぞ。其知らざるべき所差別あるに因る。差別とは寧ろ相對の謂あり。故に吾人一切の所知所見は、相對即現象界を出つること能はず。されば一利を知て一害を知らざることを能はず。一害ありて一利なきこと能はず。有は無と相生し、難は易と相列び、過來の相あり、遠近大小の相あり、好悪あり、憎愛あり、一張一弛、一善一惡の浪波世界を現呈す。

衆生界の狀態なり

然るに、或は其惡を棄てて其好を得んと欲し、其一を憎で其一を愛し、日夜苦樂の二境に浮沈して、其行く處を知らず。是れ其惡を棄てて其好を求め、苦を厭ひ、樂を樂ふは、實にこれ生あるもの、性情にして、國家と云ひ、政治と云ひ、商業と云ひ、工業と云ひ、乃至山に薪を採り、道に草を摘む、皆是れ苦を避け樂を求むるの目的に出づるものに非ざるはなし。苦を避け樂を求むるは、其歸

安心

生あるもの終局の目的

する所安心の二字なり。されば安心は實に
 生あるもの終局の目的
 なりと謂べし
 然るに其知る所は現象界たり。此の世界は相對界たり。苦無くして
 獨り樂あることを得ず。好む所あれば必ず厭ふべきの所あり。到底
 生あるものは、苦樂的相對に喩喞することを免るべからず。蓋し
 苦樂的相對は實に

相對は世界の性質なり

世界の性質なればあり

宗教

果して然らば、其終局の目的たる安心は、嗚呼如何にしてか之を求
 めん。曰く宗教あり。以て安心を決了すべし。蓋し宗教は
 信認の満足して安心する方法なればなり
 斯底の疑迷に満足を與ふる宗教如何。教外別傳の宗門如何か之を説
 く。乞ふ次下追説する所を聽け

教外別傳の宗門所説

今姑らく試みに之を思へ。彼の夢は是れ妄覺たり。しかれども、夢

夢幻と醒覺

中にありては其事是れ眞實たり。夢醒めて後初めて其事の是れ妄な
 りしを知るのみ。子親を産み、死人に逢ひ、雲に乗じ、浪を歩む
 斯の如き而も夢中は誠には是れ眞實にして聊かも疑慮なし。醒者を以
 て之を觀れば、其妄なるに驚かざるを得ざるなり。然れども、醒覺
 時と云ひ、夢幻時と云ふ、共に是れ我觀念なるに於ては異なることな
 し。等しく我心に知り、我心に信じ、我心に念す。醒覺を以て悟境
 とし、夢幻を以て迷境となさんか。是れ醒覺者の眼底に過す。夢幻を
 以て悟境とし、醒覺を以て迷境となさんか。是れ夢幻者の眼底に過さ
 ず。醒覺の境、夢幻の境俱に是れ只感念のみ。等しく是れ感念あるが
 故に、夢幻を以て妄覺なりとせば、醒覺も亦妄覺ならざるを得ず
 然らば何れをか眞とし、何れをか妄とすべきや。是の念を爲すこと
 勿れ。今若し夢幻者あれば、明者爲めに其迷を諭し其悟を告げ、
 々乎として、之に其醒覺を示す。又若し醒覺者あれば、明者爲めに
 其迷を諭し其悟を告げ、
 塵々乎として、之に其夢幻を示す。夫れ斯

の如し。明者の本意果して何如。夢幻。醒覺等しく是れ感念なり。眞を以てせば。俱に是れ眞のみ。妄を以てせば。俱に是れ妄のみ。畢竟兩者迷に非らず悟に非ざることを觀了せば。是れ明者の本意にして。

真正の理眼

真正の理眼あり

夫れ然り。夢幻者は夢境を以て眞となし。醒覺者は醒境を以て眞となす。之の兩者若し相會することあらば。互ひに。彼は妄にして我は眞なることを信認せん。何ぞ知らん。之を眞とするも之を妄とするも俱に是れ。

感念上に過ぎざることを

退て。吾人が現在の世界森羅万象の所感觀念を商量せば。亦所謂前者の如きものに等しきことを發見すべし。蓋し吾人の現在世界とし。森羅万象とし。彼とし。此とする所のもの。是れ。

世界は是れ吾人の感念

吾人の感念

に過ぎざればなり。吾人が感念上認めて以て眞となすは。猶ほ亦夢幻者の夢境を以て眞となすに異ること無きや否。試みに眼を轉じて。曰れが一切の觀念に就きて之を考究せよ。

實物知得も亦吾人の所感に過ぎず

動もすれば曰く。吾人は實物を知得すと。其實物を知得すと謂ふもの。是亦心の所感のみ。是れ只我感念のみ。等しくこれ一物にして。視る處に因て其大小を異にし。觸る處に因て其感ずる所を異にす。飢者は食を以て甘きの無上なるものとし。渴者は飲を以て甘きの無上なるものとし。利あるときは則ち愛念生じ。害あるときは則ち憎念生ず。當さに知べし。之を佳味なりとするも。之を惡味とするも。之を可愛とするも。之を可憎とするも。皆是れ其物に在るに非ずして。吾が心に因て現する所の境なることを。且つ夫れ吾人衆生界一切の所知は。眼耳鼻舌身の五根に依る。而して眼根最も其發達を極め。耳之に次ぎ其餘は頗る幼稚なりとす。今若し鼻根最大の發達を極むること。吾人の眼の如く。而して他根之

森羅万象唯識所變

に次くものあらは 其衆生界の所知觀念一切之に相應して 吾人の所感の如くならざることを 論と待たざるべし 又吾人が万度に於る觀念即ち衆生界の所見は 只色 聲 香 味 觸の五種より成るものにして 實に五種の覺官に依りて 感じ得たる所のものみに過ぎず 若し此の五種の外に 感せらるべき資質境遇ありとも 吾人は之を知るに由なかるべし 而して五種の外に 更に感せらるべき資質境遇なしとは断言すべからず 彼の下等動物の 只一二の覺官を具するものよりすれば 吾人が五種所感の境遇は 實に想もよらざることなるべし 而も是等の下等動物も 亦其所感に相應して 識らず其境界の所見を立つること 吾人が現在境界の所見を立つるが如けん

されば吾人が彼とし此とする所のもの 唯此の心の所感に過ぎず 以て諸法の眞實とは謂ふべからず 經に曰く——森羅万象唯識所變——と (識とは此の心のことにして感情の義を含む) 是れ

唯心の第二義

唯心の第一義なり

我が一切の所知所見は 相對界にあらざれば成立すべからざるものなること 及び知ることは相對に因て起る必然の事情なること 既に之を述べたり 夫れ然り 相對に因て起る必然の事情の外には

世界も無く亦吾も無し

相對に因て起る必然の事情を概括すきは 物と心との二なり 物は心に對し心は物に對し 物を離れて心無く心を離れて物無し 互ひに能所を爲じて 知と被知と起る 知は心界にして被知は物界たり 物に幾多の形相あれば 心に幾多の觀念あり 心滅するときは物亦滅し 心益精妙なるときは物亦益精妙當に知るべし 雜駁なる世界森羅万象は 是れ雜駁なる我が心念なることを 是れ

宇宙二元の概説あり

此の二元は是れ相對の現象たり 現象あるもの必ず其本體なかるべからず 此の二元の本體果して如何 既に是れ本體たれば 吾人の

相對に因て起る必然の事情の外には世界も無く亦我もなし

物心の關係

宇宙二元論

現象と本體

本心

宇宙の大源本極

唯心の第一義

三界唯一心
一切唯心造

所知に與るべきものに非ず 然れども 其本體たるや疑を容るべからず 又本體は其現象相對を即攝することも疑を容れざるなり 現象相對を即攝するものなるが故に 本體は非心非物にして又亦心亦物の大活元體たり稱くるに名なし 強て名けて之を本心と云ふ 又眞如と謂ひ佛と稱す 是れ

宇宙の大源本極なり

物も心も一切 悉皆此本心の現象たり 皆此の本心より生ずる所なり 是れ

唯心の第一義なり

經に曰く——三界唯一心——又曰く——法界の性は一切唯心造なり——と

然れども 能所に於て固く差別を執じ 一切の被知境を我心の外に隔視し 各其所見の世界に迷惑し 諸法に縛束せられて六趣に沈淪す 是れ所謂凡夫の境界なり

解脱の義

坐禪工夫の力

其唯心の所造を解き 苦樂的相對を脱離する 之を

解脱と云ふ

坐禪工夫之力 克く之の大解脱を成就して

大安心に到得せしむ

坐禪工夫之力克く之の大解脱を成就して 本來圓具の三徳四智の

大光明を發揮す

故に大覺禪師 坐禪論の首に大書して曰く——夫れ坐禪者大解脱の法門なり 諸法も是れより流出し 万行も是れより通達し 神通智慧の徳此の内より起る 人天性命の道此の内より開く 云々——と

次に進て

坐禪は如何あるものなるやを一言をべし 夫れ諸法は(森羅万象)上來述べたる如く 其の所見所感なるのみと雖 所謂凡夫の心念は 無始劫來幾世の間 妄想妄覺に固結し來れるものなれば(所謂無明漆桶)一朝一夕にして之を破掃し盡すことを得ず 多數の年月を閲して 久々に純熟し 漸く心焰の惡習慣を(久劫の習氣)脱離し

無明の漆桶

久劫の習氣

坐禪の理論

万法即真如真如即万法

眞如實相界

相對界を離れて本體の絕對界に歸す 本體の絕對界は是れなり 又大圓鏡智と云ふ 而して眞如實相界は別に相對を離れてあるものに非ず 相對するのまゝが是れ眞如實相の絶体界たり 譬へば數學上の

一三三

の一式あらんに この正と負とは相對の現象界なりと雖 其まゝ(一三三) 是れ非正非負の本體なり 而して非正非負の眞如本體の其まゝ、是れ亦正亦負にして 正と負とを即攝するや明なり 吾人の心意も亦其相對を解脱して 眞如實相界(佛心)に歸するも 空寂無認瓦石枯木の如きものに非ずして 其相對の一切を即攝す 是れ大悟佛心には三徳四智を有する所以なり 又近く之を譬ふれば 吾人が心念(心象)は

一三三

大悟佛心に三徳四智を有する所以

靜坐修禪の重要なる所以

厭世教にあらす

に於て「」にあらざれば「」にあらざれば「」と其相對的一方の何れにか粘着し 其差別的一方の何れにか心を奪はるゝが故に 到る所偏執にして 障礙を感せざる莫し 然るに若し悟覺して 絶体界に歸し 大佛心に至達せる以上は 此の心「」にも奪はれず 「」にも粘着せざるが故に 「」にも之を即攝す 是れ所謂諸佛の不動智にして 金剛經の住する所なくして而も其心を生ずる底なりとす 住とは粘着なり偏執あり 粘着し偏執する所あれば此の心柱に停りて 必ず他に放心忽諸たるの所を記憶はず 一方に粘着し一方に放心し 觸るゝ所斯の如くんば 到底苦樂的相對を脱離し 生滅流遷を免るゝこと能はず 是れ靜坐修禪の重要なる所以あり 上來所説 是れ坐禪の理法にあらす 猶ほし茫々たる遠岸の眺見に過ぎず 其妙訣蘊奥は自ら大悟の後に知了すべきのみ 世人斯の理に達せず 徒だ禪法の無念無心を唱ふるを聞き 世俗を破却するを見て 輒ち以て厭世教なりとし 或は之を臆測して 大

厭世を説く所以

悟底の靈智を疑議す 轉迷開悟の道固より須く世と厭はざるべからず 蓋し其所謂世と稱するものは 妄見の翳翳迷惑の根柢たり 世に執し世に縛せられ 世に泣き世に笑ふて彼の夢覺と等しきことを知らず 靈性益隠れ靈智益味ひ 是を以て開悟の道須く之の世的眼を打破せざるべからず 此れ佛其小乘に於て

厭世を説く所以より

而も其何が爲めに世を厭ふかを原ゆれば 實に是れ世の爲めにするものに外ならざることを知らん 豈世を離れ世を棄て、別に佛教あるべけんや 彼の親の其子に於る 愛溺の眼を以ての故に 其惡しきを知ると能はず 我の敵に於る 憎怨の眼を以ての故に 其善を知ることを能はず 其子を知らんと欲せば 宜に愛溺の眼を打破せざるべからず 其敵を觀んと欲せば 宜に憎怨の眼を打破せざるべからず 故に善く其子を知るものは 則ち其子を受せず 善く其敵を觀るものは 則ち其敵を憎まず 然るに是を以て憎兒の親となし忘

厭世は棄世の意にあらず

宗乘の奥要は衆生濟度拔苦與樂

三身
法身
報身
應身
自性身
受用身

敵の者と謂はんか 其過てるや言を待たざるべし 佛教に於て姑く厭世を説くと雖

豈棄世の意あらんや

實に是れ世を愛するの切あるに由るものにして 修道無二の方便なり 序説に於て既に述べたる如く 禪門宗乘の奥要は本具の徳即佛心の放光たり 而して佛心の放光は

衆生濟度拔苦與樂

に外ならず 三身と謂ひ三徳と謂ひ四智と謂ふ 悉く是れ此の世を離るゝものに非ず 蓋も佛の三身とは

一法身
二報身
三應身

にして 法身とは本元實相の本體にして 眞如法性の自性身なり 是れ佛の大斷徳なり 報身とは其佛陀の當躰を知証し 万法に於て

變化身

融通無碍 現身に應じて大機を回らす所の受用身なり 是れ佛の大智徳なり 應身とは三界六趣に應同し 他の根機に隨順し 他を利し物を救ふの變化身なり 是れ佛の大悲徳なり 臨濟大師曰く 偏が一念心上の清淨光 是れ偏が屋裡の法身佛なり 偏が一念心上の無差別光 是れ偏が屋裡の報身佛なり 偏が一念心上の差別光 是れ偏が屋裡の化身佛なり云々 四智とは

大圓鏡智
平等性智
妙觀察智
成所作智

一大圓鏡智

二平等性智

三妙觀察智

四成所作智

是なり 坐禪工夫 塵々として動せず 一々の公案を提撕して 疑ひ去り疑ひ來り 一旦豁然として入得すれば 十方虚空をく三世時なく 天地万物の根源に徹し 所謂絶對本心の真如界に達す 是れを大圓鏡智と云ふ すでに斯の如く徹見すれば 山河大地森羅万象

悉是性我 我即山河大地森羅万象

生佛本來同躰不二

なることを了す 是れを平等性智と云ふ 而して平等性界に

大機を回轉し

同塵混俗 化他濟度無碍あり 是れを妙觀察智と云ふ 又た機に應じ場に隨ひ 種々の所作を成す 是を成所作智と云ふ 本具の徳性斯の如し 佛心の放光斯の如し 當に知るべし 世を離れて別に佛教なく 有爲を離れて別に禪門をたごことを 興禪護國論に曰く 外は律義にして非を防ぎ 内は慈悲にして他を利す 之を禪宗と謂ふと

佛心印

眞理の賊

上來聊か禪門の要理を説き來りぬ 然れども適々傳授の佛心印に至ては 文字言語を絶す 若し未だ大悟底の人にあらずして 其心印を形像し思想の中に観ることあらば 是れ眞理の賊にして 以て禪學を了じたりと爲すが如きに至ては 狂癡頑痴の病者にして 聞道

世を離れて佛教なく有爲を離れて禪門なし

佛祖機縁

の輩に非ざるなり
 曾て釋迦牟尼佛 正法眼藏の心印を以て 摩迦訶葉に附囑し 迦葉
 之を阿難に傳ふ 阿難迦葉に問て曰く 釋尊金襴衣を傳ふるの外何
 の法をか傳ふと 迦葉(阿難)と呼ぶ 阿難應諾す 乃迦葉曰く 門前
 の刹竿を倒却せよと 阿難言下に大悟す 又二祖の慧可達磨に安心
 を乞ふ 磨曰く 心を將ち來れ 汝か爲めに安心せしめんと 二祖
 曰く 心を求むるに不可得あり 磨曰く 汝が爲に安心し畢りぬと
 後ち其所解を問ふに及んで 二祖三拜して位に依て立つ 磨曰く
 汝吾が髓を得たりと 百丈馬祖に參せしとき 馬祖威を震て一喝
 す 爲めに百丈耳聾すること三日 黄檗百丈に參す 百丈即ち此の
 事と舉示す 黄檗悟覺す乃ち舌を吐く 臨濟始め博く經論を讀る
 嘆して曰く 此れ濟世の醫方なり佛の本旨に非すと 往て黄檗に參
 じ 三度佛法の大意を問て三度打たる 遂に大愿の處に至て 始め
 て其本旨を領せりと 拈華微笑乃至馬祖の一喝黄檗の三十棒 這箇

以心傳心

只管打坐身心脱落

公案 參禪

は是れ何事ぞ 此の間綿々たる傳授 一器の水一器に至るが如し
 若し夫れ是の事を得んと欲せば 須く之を自己に求めよ 如何にし
 てか自己に求めん 曰く只管打坐して心に求むる所莫かれ 是れ以
 心傳心なり 是れ傳心印なり
 正法眼藏辨道話に曰く——この單傳正眞の佛教は 最上のあかの最
 上なり 參見知識の始めより 燒香禮拜念佛修懺看經を須むず た
 いし打坐して身心脱落することをねよ もし人一時ありといふとも
 三業に佛印を標し三昧に端坐するとき 遍法界みな佛印とあり 盡
 く虚空のごとくさととりとなる 云々——

本 說 (下)

道學の者須く參禪せざるべからず 參禪は是れ修行鍛冶の關要なり
 坐禪辨道の活機なり 公案は學人鍛冶の鐵槌なり 轉迷開悟の策
 策なり 公案參禪實に是れ

禪門佛祖の機縁あり

是れ次下に參學を録せんと欲する所以なり
 (備考) 今北洪川禪師曰く——吾宗佛祖の機縁を公案と稱するものは、喩へを公府の案牘に取る。蓋し大法の在る所は、而も王道の治乱實にこれに係る。公とは乃ち聖賢其轍を一にし天下其途を同くするの至理なり。案とは乃ち聖賢理を爲すの正文を記すなり。叢林の能化たる者は、乃ち公府の長吏の如し。蓋し公案を取て法を爲し、而して學人の不正を斷せんと欲する者なり。蓋れ三人の臆見に非ず。即ち靈源に會し、妙旨に契ひ、情量を越へて生死を破す。三世十方百千の開士と、同じく慕るの至理なり。吾宗之を尊ぶ者は、少林は直指を尊ぶ。祖師東來佛心印を單傳せしより、南北宗を分ち、五家派を列す。以來諸善知識其所傳を操て、其所指を負ひ、實印

句に參すること
 意に參すること

き主應し 牛を得て馬を返へすの頃に於て 危言細語 口に信せて
 捷出すること 迅雷の耳を掩ふべからざるが如し 庭前の柏樹子麻
 三斤、乾屎橛の類の如きは、略ぼ義路の人に與へて穿鑿することなし
 之に即けば、銀山鐵壁の透るべからざるが如し 唯明眼の者能く語
 言文字の表に逆奪して 一唱一和 空中の鳥跡水底の月痕の如し
 千途万轍と雖放肆縱橫 皆得て而して擬議すべからず 遠く鷲嶺の
 拈華より今に迄るまで 又豈に一千七百則に止るのみならんや 他
 なし 必ず悟心の士を待て 取て以て證據となすのみ 決して人の
 記持を益して、而して談柄を賣くるを欲せず 云々——
 夢窓國師曰く——言句の上に於て 把住放行を理論し 那邊這邊を
 商量する 之を句に參する人と名く たとひ默然として壁に向て坐
 すども 何中に雜知雜解をたくわへて 按排計較するは、亦是れ句
 に參する分なり 然則ち一切の智解情量を放下して直に一則の公案
 をみるは、是れ意に參するの手段なり たとひ古人の語録を見知識

學道修行の要訣

無門禪師の手裡活鞭

の法門を閉けども直下に懐を忘して義路理路の上に解會を生ずること無くば則是れ意に參する人なり學者若し分明に祖意を悟りぬれば善知識此の人に對して五家の宗風の差別を論量し其把住放行擒縱殺活抑揚褒貶等の手段体裁を商量すること妨げあしむかやうの句を參得せざれば善智識として人を化すること能はず古人の得法の人に對して言句を疑はざるを大病とすといへるは此意なり禪宗の手段のみならず教門の施設乃至孔孟老壯の教外道世俗の論までも知らずんばあるべからず云々

鐵眼禪師曰く——學道修行の要訣はたゞ意に參すると云ふことの一事のみ云々

次下無門禪師の手裡活鞭を録示す未得底の人は其の句に參せんよりは唯だ其の意に參すべきことを忘るべからず句下は著語細筆を加へて却て義路理路に彷徨せんことを松乃ち敢て蛇足を加へず

○(摘解)

擧す あげしめすの義

因は ちなみと副す親むの義

第一則 趙州狗子話

無門禪師 堂に上り 趙州狗子話を擧す 曰く昔し一僧あつて因に趙州和尚に問ふて云く 狗子に還て佛性ありや 也た無や 趙州對て曰く 無

さて無門禪師大衆に謂て曰く 參禪は祖師の公案の關所を通りぬけなければならぬ 妙悟と云ふは 種々の念想の往來するのが絶ゆるのが要である 祖關も通れず 心路も絶へぬとあらば 此れ依草附木の精靈じや

とんちものが祖師の關所であるか 名けて禪宗無門關と曰ふ もし是が 通りぬけられたらば 親しく趙州和尚に見ゆることが出来る のみならず歴代の祖師方と手を握りあつて なるかも祖師方と同じやうな境界になる 何んど愉快なことではあいか 一とつ通がぬけて見せやうと云ふものは無か 之を通りぬけやうとするには

提撕とは心頭にかゝるこ
會とは理解の義

頌は梵に偈陀と云ふ略し
て偈と云ひ又偈頌と云ふ
偈陀は天竺の詩也支那の
詩体中頌の体に似たり故
に譯して頌と云ふ

傾者 ちのあく貝

なまやさしきことではおかぬや 三百六十の骨筋 八万四千毛竅
此の身體のすみとく殘さず 通身に大疑團を起して この無の字に
參じ來れ 晝夜に提撕して 有無の會をなしてもならぬ 虛無の會
をなしてもならぬ 箇の熱鐵丸を喉に打ち込たる如く 身命を忘れ
て之を嚙で見よ いつものやうな情識分別をうちすて、久々に純
熟したならば 自然に内外打成一片となつて 此の無の字に承當す
べきやうのときは臣子の夢を得たるが如く 只自知自了せよ
さあろうなつた曉よは 本來清淨の光が蕩然として打發し 天を驚
かし地を動じ 關羽が手中の太刀をも奪ひ取て 佛に逢ては佛を殺
し祖に逢て祖を殺すの活機用が現るゝや されば生死流浪も心にか
くるに足らずに六道四生がうのまゝ遊歩場となるぞと さあ せう
提撕してよかろうぞ 平生の氣力を盡して箇の無の字に承當せよ
朝も夕も夜も晝も間斷なく參得せば 法燭一点して便著をうるこ
と

頌意
狗子佛性の一語は趙州和
尙が全提の正しき命令で
あるぞや聊でも有さか無
さかの分別に涉つたなら
ば死物となるぞ

一轉語とは一轉して下語
するを云ふ好一著と同じ

頌に曰く 狗子佛性は全提正令たり 纔に有無に涉れば喪身失命せ
ん

第二則 百丈野狐話

昔し 百丈和尚談法るとき 一人の老人ありて 毎に衆に隨て聽法
し 大衆の歸るときは老人も亦歸りしに ある日に限りて此老人一
人歸らず 乃師之に問て曰く 面前に立つものは誰ぞや 老人諾
るれがしは 過去の世 迦葉佛の時に會て此の山に住持たりし あ
る時學人が問ふに 大修行底の人は因果に落るや否と 之に對へて
因果に落らずと 道ひし其見解に因て 五百生の間野狐身となりし
ものでござる 希くは和尚の一轉語によつて 此の野狐身を脱せん
ことをと 乃ち老人あらため問ふ 大修行底の人還て因果に落るや
否 師即曰く 不昧因果と 老人言下に大悟して野狐の身を脱し得
たりと

贏得 却て也 ましたと云ふ義を合

采は彩也 雙六の目のいふより

賽は筒の事 阿采一賽とは語法一致の義

双六のさいは二つなれどし目のしりやうは一つじや

頌意 不落不昧の双六のさいは阿つであるが目のしりかたは一つじや 不昧不落と一轉して見たるも又た千万の紺じや 畢竟言語の上や情識の分では墮脱の處は究められぬわい

大衆これを何と聴くか 不落因果は何として野狐に墮ち 不昧因果は何として野狐を脱するものぞ 不落と云ひ不昧と云ふ言句の義は別なきになんとしてか墮脱の差と見るや若し 這裡に向て不落不昧墮脱を一眼に見得られたならば 前百丈の五百生野狐に生れたが贏得て風流で有つたと云ふことも知らるゝぞ 頌に曰く 不落不昧阿未一賽 不昧不落千錯万錯

第三則 俱胝豎指話

俱胝和尚凡そ所問あれば 必ず唯だ一指と舉示す 和尚に給侍せる童子も 亦擬爲して指頭を豎つ 胝之を聞く ある時試に童子に向て問ふ 童子果して一指を舉す 胝乃及を以て其指を斷つ 童子痛に堪はず號哭して去る 胝復た之を召す 童子首を回らす 問ふ如何か是れ佛 童子例の如く指を豎てんとするに指なし そこで豁然として領悟せしとす 胝が願世せんとするとき 衆に謂けらく 吾

願世とは不生滅の体なれども世情に順て滅を示すの義

頌意

一、二の句は俱胝は先師 老天龍の指頭を會得して而も童子の指を斷て却て天龍を鈍くしたやうじや

三四の句

そつであるまい童子の人我榮障の山が性海を塞ひて流通せぬ所をつんと断て流されたは彼の巨靈神が太華を撃て流通せしめた神力と同じである 多子無しの多は他に通ず子は助辭なり へつなことは無いとの義

れ天龍(先師)の一指頭の禪を得て 一生つかつてもつかひきれぬわい 俱胝ならびに童子の悟りたる處は 指の上では無いぞもしこゝがわかつたならば、俱胝和尚も童子も亦此の話の參者も 三者一串で差別は無きや 頌に曰く 俱胝鈍置す老天龍 利及單提小童を勘す 巨靈手を擡げて多子無し 分破す華山の千万里

第四則 世尊拈華話

昔し 世尊靈山會上に在て 金婆羅華を拈して大衆に示し給ふ 是の時に大衆皆默然たり 惟迦葉尊者のみ破顔微笑す 即ち世尊言く 吾に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり 悉く摩訶迦葉に付嘱すと なんと黄面の瞿曇は傍若無人ではないか 白いものを黒いと云ひ

羊頭を懸て狗肉を賣りてんだ
もし當時大衆が都て笑ひたらんには 正法眼藏はせう傳ねるであら
う 又もし迦葉が笑はなかつたときは 正法眼藏はせう傳ねるであ
らう 正法眼藏に傳授が有るものと謂ふならば 黃面老子が田舎里
々の痴男女をたふらかした程のことぞ 若し正法眼藏に傳授なしと
謂ふならば 甚麼の爲めに迦葉に獨り許したるのか 大衆をせし
て參じ來れや

頌意 華をひねくり來つて言句
上にあらざる本旨の尾さ
きが露れた
さすがに迦葉はこの旨を
得て破顔微笑したが人天
百万の大衆は手の稽さそ
ころしない

第五則 州勘菴主話

昔し趙州和尚 一庵主の處に到り 問ふて曰く 有りや有りやと
乃庵主拳頭を竖起す 州の曰く この處水淺くして船を泊るに堪へ
ずと便ち行る 又一庵主の處に到り 問ふて曰く 有りや有りやと

乃庵主亦拳頭を竖起す 州の曰く 縱奪活殺の手段を能くせりと
便ち禮を作す

さてこの仔細は何ぞ 二人の庵主同様に 握り拳をつき起てたるに
一つは肯ひ一つは肯はぬ 果してこの請訛は甚麼處に在る乎 も
し這裡に向て 轉語を下し得ば 趙州の舌頭平常にして 扶起放倒
太自在を得るである

むねはあれど 本來趙州が二庵主を勘破して抑揚自在に遣はれたの
でい無む 却て趙州が二庵主に勘破されたのじや 若し二庵主の腕
前に請訛があるを謂は 参學の眼が具わらぬ輩じや 優劣有無の
眼を棄てねば解るまいぞ 殺人刀活人刀
頌に曰く 眼は流星 機は聖電

第六則 岩喚主人話

岩喚主人話

辯訛は優劣の意
這裡はこのころ
扶起放倒大自在はれがさ
うと起さうと大自在じや
即ち縱奪活殺自在を云ふ

頌意 眼は流星の如くあきら
に機は聖電の如く活脱で
ある あいまことに活殺
自在の腕前じやぞや

様々は隠れ明なる良

神頭鬼面云々は佛師首にかけた人形箱かすの才鬼や佛を引出すの意乃識神を弄するの義

この頃は長沙等の作をそのまゝに充たるなり昔は學人の眞佛を識らぬのは只識神を認めて眞の物と思ふに依て眞佛が悟れぬ識神は無始劫來無明生死の根本であるのに痴人はこれを本來の佛と云つてゐる情れば識が主人公じや迷へば主人公が情

瑞岩和尚は 毎日みづから主人公と喚で 復たみづから應諾す 又
怪々せよと自ら固く告げ 復自ら諾す 又他時人の瞞を受くること
莫れと誨へ廻復自ら諾許を許す 識人曰 吾人曰
なんど瑞岩和尚は 自分で賣りこんで自分で買ひ ことごとく神頭
鬼面を穿らべだしたか 畢竟これ佛の仔細や 對して
一つは喚と成る二つは諾する底 一つは虚を底 一つは人の瞞を不受
底に認著すれば却て不是じやううかど云ふて鶴のまねをするは
野狐の見解にかつるぞ 識人曰 吾人曰 野狐の言は 識神を認むるが爲めなり
無量劫來生死の本痴人は 喚で本來の人と作す 識人曰 吾人曰
第七則 洞山三頓話
雲門禪師の許に洞山參じ來る 門乃問て曰く 近く離る何れの處や
洞山曰く 查渡地名 雲門又問ふ 夏いづれの處にか在る 洞山曰く 湖

識に歸するものじや

飯袋子は 九にもならぬ 飯ぶくろ

草料は 修行の材質の意

契悟多きは家門の繁榮なり

注破は人解の義

南の嶺麓 雲門又問ふ 幾人時か彼を離る 洞山曰く 八月二十五 門
曰く 汝に三頓の捧を放るすと 明日山復た雲門に問ふ 昨日和尚の
三頓の捧を放すことを蒙る 知らず過ち甚廢の處にか在るや 門曰
く 飯袋子 江西湖南に退去し行け 此に於て洞山大悟すと
馬毛雲門が當時 本分の草料を與へて 洞山をして一條の活路を得
せしめたるならば 家門繁榮せんは 慈悲過ぎて三頓を放した故に
家門寂寥となつたや 洞山は終夜心海の是非の浪を起して 明日黎
明を待ちかねて再問したが 他のために飯袋子など、注破せられ
た 此れでは洞山が直下に悟り去るといふも利根では無い
試みに且らく諸人に問ふべし この三頓の捧は洞山が喫すべきであ
るか また喫すべからざるものであるか 喫すべきならば 草木叢
林までも皆捧を喫すべきである もし喫すべからざるものならば
雲門三頓の捧を放すと言はは誑語と成るべきや 道徳の處を明ら
め得て見よ もし明め得たならば 洞山の雲門に推逼られて死に到

頰意
 獅子は其子を視るに万切
 崖より跳ね落して其中
 より踏躑して親の胸にか
 みつきしる氣がいのあ
 るを取て愛育する
 今雲門が三頓の捧を放す
 と其の飯後子をつきはな
 して見るに早くすまに身
 を跳して来る
 再び雲門の一著子を叙べ
 たが前よりは後の箭が深
 かりしぞ
 迷子跌は迷離なる子をみ
 るの極映

る所に於て、一口の氣息を出し得るぞや
 頰に曰く、獅子兒に教ふ迷子の跌き前んで跳躑せんを擬するに、早
 快身を翻す、端無く再び叙ふ當頭著し前箭猶輕し後箭深し
 第八則 洞山麻三斤
 僧あり洞山和尚に問ふ、如何なるか是れ佛乎山曰く麻三斤と
 なんと洞山老人は親切にも麻三斤と兩唇を舐て、蚌蛤の口を開
 けたりやうに其の肝腸を露出されたるは、あるの肝腸が見ゆるか、と
 主や、あんどしたる洞山と同一眼見たるべきぞ
 頰に曰く、突出す麻三斤、言は親く意は更に親し、來て是非を説く
 者は、便ち是れ是非の人のみ
 第九則 松源大力量人
 松源和尚の曰く、大力量の人、甚に因てか脚を掻て起たさる、又云

頰意
 香水海は善哉經遊世界
 品は詳也
 所謂大力量の人は脚頭を
 擧て香水海を踏みたをし
 低頭して四禪天を見下
 すぞや
 派池たる一身は蓮乾坤に
 該蓋して脚を掻て起つべ
 からず開くべき口もなく
 口を開て云さし舌頭上の
 言語にはあらぬ、見著す
 るに處住は無いぞ

口を開くに舌頭上に在らずと
 あへ、松源老人は其の肝腸を顛倒せられたが、只是では人の承當す
 ることはなるまい、たとへ承當するを云ふも、乃公無門自ら自分を
 指が處に來て、頰の捧を喫を得て承當するが好ぞ、なせとならば
 黄金の眞偽は、火の中であく、其の分らぬ、正に眞金を識らうと欲
 せば、痛痒火裡に入て看は、
 頰に曰く、善脚を掻て踏翻す香水海、頭を低れて俯視す四禪天、一箇
 の渾身著るに處無し
 第十則 雲門乾屎概
 僧あり雲門和尚に問ふ、如何なるか是れ佛、門云く、乾屎概と
 雲門の問ひに應じて、忽爾として乾屎概と言ひ放たば、貧家の素食
 忙時の傳語、同一しや、しかるに動もすれば、此の屎概を將ち來て
 門戸を搯へ挂るぞ、こゝで佛法の興衰も分るじや、さあこの無義味

頭意
乾屎橛と等られた密機は
電光石火の如く開眼を容
れざる活機ぞもし聊か
も眼をちらつかせたら
ば早くこれ垂くぞや

道真は「このうちと云ふ
こと」
眼筋を生ずるは眼暗赤筋
を生ずる程に工夫するを
云ふ
迦葉と阿難と兄呼び弟應
じ如来の妙心を説いたは
どに却て一家の愧を揚げ
たようだが其應答の間に
心の華が開発したほどに
不器陰陽の別の春を來た
したぞ

の處についてとつと參得せよ

頌に曰く 閃電光 擊石火 眼に眩得すれば已に蹉過せん

第十一則 迦葉刹竿話

阿難、迦葉尊者に問て曰く 世尊金襴の袈裟を傳ふるの外何物をか傳
ふ 乃ち迦葉、阿難と呼ぶ 阿難應諾す 迦葉曰く 門前の刹竿を倒
却せよ 阿難言下に了悟す と

諸仁者、若し這裏に向て一轉話を下し得て親切ならば 便ち靈山會
上の拈華微笑の一事、儼然として目の前に見ゆるや 若し然らざ
らんには、たとへ七佛の第一毘婆尸佛より心を留め修証して今日に
到るども、この妙心を得ることはできまいぞ
頌に曰く 問ふ處は何ぞ 答る處の親しきに如ん 幾人か此に於て
眼筋を生ず 兄呼び弟應じて家醜を揚ぐ 陰陽に屬せず 別に是れ
春

第十二則 不思善惡

六祖ちなみに 慧明上座趁て大庾嶺頭に至る 六祖明の至るを見て
即ち衣鉢を擲て曰く 此の衣は信を表す 力を以て争ふ可きや
君が將ち去るに任せん 乃ち明之と擧げんとするに 山の如くにし
て動かす 明、踟躕悚慄し 曰く我來て法を求む 衣鉢の爲めに非ず
願くは行者開示し給へ 祖云く 不思善不思惡 正與麼のとき 那

脚踏は うづくまり進む
能はざる良
悚慄は おそれものしく
なり
與麼の時は かゝるとき
那箇は なにがの辭

箇か是れ明上座本來の面目 明、當下に大悟す 遍體流汗し泣涙して
禮を作し曰く 上來の密語密意の外、還て更に意旨ありや否や 祖曰
く 我今汝が爲に説く者は即ち密には非ず 汝若し自己、面目を返照
せば 密は却て汝が邊に在るべし 明云く 某甲、黃梅に在て衆は隨
ふと雖 實に未だ自己の面目を省せず 今指授を蒙て人の飲水して
冷暖自知するが如し 今行者六祖は是れ某甲の師なり 祖云 汝も
し是の如くんば 吾と汝と同じく黃梅を師とせん 善く自ら護持せよ

頌意
無相本來の面目なるが故
に描も書も及ばず
生して受くることも休ま
ざりながら又目前にれき
くとして蔵るゝ處はな
い三災壞空の時といへ
ども朽ることなきもの
ぞ

語黙は離微に渉る云々こ
は語あれば物に即して離
に渉り黙すれば閑微に渉
るの義

と
これ六祖は一家急迫の場合に出でたるものである。しかるに 老婆
親切なること、彼の蒺藜の穀をはぎ核を去て口裡になげこみさわ
嚙めよと言ふが如くじや、諸仁者かうまでになつておらば、嚙下せ
られるであらうが
頌に曰く、描すれども成らず、書けども就せず、賛すれども及ばず
生受するを休よ、本來の面目藏する處を没す、世界壞するを
き渠は朽ちず

第十三則 離却語言

風穴和尚因みに僧あり問て曰く、語黙は離微に渉る如何か通じて犯
さるる。穴曰く、長に憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香して
風穴和尚の機は掣電の如くしてやられたが、如何せん前人の詩の二
句を取て、そのまゝ言れたるにより、時の人か往々其首句義解の

頌意
風骨は仙風道骨即ち塵外
の良、道箇を會得するも
のは言語以前に、すでに
分付の處ありこゝを會せ
ずして蕤路に歩を進め言
語に渉ては手の措き所も
ないのが知れてゐるぞや

摩訶衍は大乗の梵語なり
四句百非
○一に非ず
○一も亦一に非ず
○一に非るも一に非るに
非ず
○一に非るも亦一に非る
に非ず
斯の如く一に四句の非あ
り異も亦然り有無亦然り

落し穴に墮落してもがたがる、若し這裏に向て見得して親切あら
ば、言語を打ち棄て、言語の外の一句を將ち來れ
頌に曰く、風骨の句を露さず、未だ語らざるに先つ分附す、歩を進
めて口喃々、知ぬ君が大に措くことなきを

第十四則 三座說法

仰山和尚夢に彌勒の所に往て見るに、堂中の諸位皆足れり、惟だ
第二座のみ空ふす乃ち師、第三座に就く、一尊者あり、白槌して云
く、今日第三座に當て說法するありと、師乃ち起て白槌して云く
摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶す、諦聽諦聽、是に於て衆皆散し
去ると
諸仁者、且らく道へ、是れ說法なるかはた不說法か、口を開たならば
摩訶衍の旨を失ふべく、不説として口を閉るも亦喪失すべし、開か
ざるも閉ぢざるも、ともに十萬八千里、遠いことじや

即ち一、異、有、無の四各
四非あり合て十六非なり
之を過現未に配するときは
四十八非なる之を已
起未起の二に配するときは
九十六非なる之に最
初の四非を加へて百非なり

煩意
如來の説かれたのが已に
夢であるのに仰山又其夢
中に夢を説いた 仰山和
尚大衆をばかしたわい
捏怪とは 妖怪と云ふに
等し
耶當は 委實の良 あり
よれたる義

煩意
可憐過ぎて主人公の徳が
損じたマウじや 言句を
絶すれば眞實地に到るの
功し有ることよ たさへ
麻姑仙か云たる滄海の桑
と變する程の劫を歴ると
し此の旨の消息は君が爲
めに通るまいぞ

頌に曰く 白日青天夢中に夢を説く 捏怪捏怪 一衆を誑誑す

第十五則 不是心佛

南泉和尚因みに僧あり問て曰く 還て人の與めに説かざる底の法ありや否や 泉曰く有り 僧云く如何か是れ人の與めに説かざる底の法 泉曰く 不是心不是佛不是物と 南泉老人は這の僧に問はれて 不是心不是佛不是物と のこらす自家の私珍を畳り出して與へ 却ておのれは 郎當のありさまじや頌に曰く 叮嚀君徳を損す 無言眞に功あり たさへ滄海は變するも 終に君が爲に通せず

第十六則 久響龍潭

龍潭因に徳山請益して夜に抵る 潭云く 夜深けたり 子何ぞ下り去らざる 山乃ち簾を揚て而て出づ 外の闇黒なるを見て 却回し

なんさなれば世界變する
時も銀れ朽ちざる底の那
一人なるほごに

疏抄は 經文の疏 註抄
註なりこの時の疏抄は金
剛經の疏抄なり

憤々は 心通せんことを
求めて得ざるの貞
排々は 口言はんを欲し
未だ能くせざるの貞

て云く 外甚だ閑しと 潭乃ち紙燭を点じて山に與へんとす 山手

を伸べて之に接得せんとするや 潭輒ち燭を吹滅す 山是に於て忽

然として省悟し 便ち禮を作す 潭曰子箇の甚度の道理をか見る

山云く 某甲今日より去て天下の老和尚の舌頭を疑はずと 明日に

至て 龍潭上座して曰く この中に箇の漢あり 牙は劍樹の如く口

は血盆に似たり一捧に打却するも頭だも回さず 異日孤峯頂上に向

て 吾が道を立することぞ在らんと 山乃ち疏抄を取て 法堂の前に

於て一炬火を將ち來り 提起して曰く 諸の玄辨を窮むるも 一毫

を太虚に致が如し 世の樞機を竭すも 一滴水を巨壑に投するに似

たり 言ひ終て乃ち 疏抄を焼た禮辭すと
この話はもと 徳山が初め蜀を出るときに南方魔子の輩を破却しく
れんど大言を吐き 心憤々口排々 得々としてやつてきた 澄州に
到るに及んで 路に一婆に問ふて曰く 點心を買ひたいがどうじや
と (點心は ひまやすめと訓し少しく餌を食して心をしづむるの義

つまり、ひなやすめの喫飯と云ふこと。そこで婆の云ふに、御身が匣子の内にある書き物は何でござるや。徳山は之に應へて、これは金剛經の疏抄じやと示す。婆は之を閉て、其經の中に道を通り、過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得である。しかるに、御身はなんとして、點心を買はるゝか。那箇の心に點せんとせらるゝや。さあ斯く言はれて、徳山は頭を掻たが、さすがに婆子の句下に死却せず。我を折て、婆子に問て云ふ、近處に甚麼の宗師か有る。婆云く、五里の外に龍潭和尚と云ふ大徳が有ると。乃ち龍潭に到るに及んで、しめつけられ前の大言に似もやらず。諸の玄辨を窮るも、太虚の一毫である。世の樞機を竭すも、巨壑の一滴じやと言ふた。龍潭和尚紙燭を渡して吹滅したは、醜き程の老婆親切じや。和尚まだ少しは金剛般若の智慧光明の火種あるを見て、一杓の糞水をあはて、頭から注ぎかけた。かく、惡水を注ぎかけて他の猛火を打ち消し、冷々地とあして看來れば、一場の好い笑ひ草じや。

頌意
始め名を聞たときは般若の智光が有たが、澄に見て後は其智光を滅却されたほどに、なんの殊勝も無い只初めが、ましてある、やうじや

そして徳山の天を衝かんばかりの鼻孔を、溲老人の救われたは、いかに他の眼晴を瞎却したぞ。否、瞎却して來て眞正の光明は、こゝより出るものぞ。

頌意
風動幡動心動と一狀に白狀して各罪科を案上に領

頌に曰く、名を聞んよりは面を見るに如かず、面を見んよりは名を聞くに如かず。然も鼻孔を救ひ得ると雖も、争奈せん眼睛を瞎却することぞ。

第十七則 非風非幡

六祖因に風利幡を闕く。二僧ありて對論す。一人云く、幡動と。一人云く、風動と。六祖之を聞て曰く、是れ風の動にあらす。是れ幡の動くにあらす。仁者の心動くなりと。二僧悚然。

仁者聽け、是れ風の動に非ず、幡の動にも非ず。亦た六祖の心の動くを云ふにも非ず。さあ仁者、何の處に六祖の本旨を見得すべきぞ。若し風幡心を除て而も見得親切ならば、二僧が鐵を買て黄金を得るやうな好所を知るべきぞ。實に六祖大師は二僧が、うちあき議論するに、堪わかねて密意の返りを漏した、ことぞ。

頌に曰く、風幡心動一狀に領過す。只た口と聞くことを知て話墮す。

結し過した只口を開て論
論する事を知て精の年
を磨りぬすことな覺せ
ぬ箇の事は、すでに議論
の中に顯はれて、あるに

ることを覺せず

第十八則 即心即佛

馬祖因みに大梅問ふ 如何なるか是れ佛 祖曰く即心即佛
さあての即心即佛の旨を直下に領得したるは、何と若くも佛
衣じや、何を喰ても佛喰じや、何を言ても佛の語じや、何んやと
をしても佛行じや、
よりあから 大梅はこの語を得て、より、只管に即心即佛と云て、多
少の人を引て、誤て即心佛の語に定盤星を認めさした、古人は佛の
字を言ふだに口が汚れるとて三日口を漱だと傳ふるではないか、若
し是のもの俊機利根の活漢であつたならば、即心即佛と説くを聞て
すくさま両手で耳を掩て走るであらう、さあ聞くさへ、うじや
ゆめ、認著せまいものぞ、
頌に曰く 青天白日切に忌む尋覓すること、更に如何んと問は

頌意
青天白日の明麗々々かく
れしなきに他に向て佛を

たづぬることはならぬぞ
更に心佛如何と問は、
賊が捕へられて盗みもの
を抱へながら屈々と呼ぶ
やうであるぞ

外道は佛の外に道を立つ
るもの

外道問云々
外道が有言無言に涉らざ
る處を至極にもち來て問
ふなり

頌意
劔及上や水凌の上は少し
も思慮あつては走過せら
れぬぞ
據坐負久有無 凡聖計較
是非の階梯に涉らず懸岸
の高處に手を撒した活機
用ぞ

第十九則 外道問佛

世尊因に外道問ふて曰く、有言を問はず無言をも問はず、世尊據坐
良久して默然、外道讚歎して云ふ、世尊の大慈大悲我が迷雲を開て
我をして入得せしめ給ふと、乃ち禮を作して而て去る
阿難尋て佛に問ふ、外道何の所詮あつてか讚歎し去る、世尊曰く
世の良馬の鞭影を見て而ち走るが如しと
なんと、どうであるか、阿難は佛弟子である、さすがに外道の見解に
劣ることはあるまい、且らく道へ、外道を佛弟子と、相去ること多
少ぞ
頌に曰く 劔及上に行き水凌上に走る、階梯に涉らず懸岸に手を撒
ぬ

第二十則 非心非佛

馬祖因みに僧あり問ふて曰く如何なるか是れ佛 祖曰く非心非佛と

頌意 前二句は隆興録客須臾録不遇詩人莫獻詩と云ふ古句の略なり 今之を引て其ものに非ずして向上を談すれば却て仇となる 故に全く一片を抛つことはならぬぞ即心即佛と示して又非心非佛と云ふ説き盡したぞ

第二十一則 智不是道

南泉曰く心是れ佛ならず 智是れ道ならずと やれ 南泉は老耄して羞を知らぬ 鼻口を開て家醜をさらけだした ではあるが かく南泉が羞を忘れて親切なる 其思は見へたかどう

頌意

天晴て日出て雨降て地濕ふ、そのありのまゝ、露直である 而も親きに過ぎて、この孫直の旨を信得し及ぶものが少くはないか

第二十二則 路逢達道

とや この恩を知るものは少であらう 頌に曰く 天晴て日頭出で 雨下て地上濕ふ 情を盡して都て説了す 只恐る信の及ばざらんことを

頌意

達道人に逢たときは黙してもならぬ語してもならぬ何としてか之に對へん、こゝじや眼をさへぎりさゝめてつらの皮をはきこる程に一挙すべし直下に會得せば便ち會せよ別に子細はないぞ

五祖曰く 路に達道の人に逢はば 語と黙とを以て對へされ 且らく道へ 甚麼を將てか之に對せん 諸仁者 かくる場合に、よく對へ得て親切ならば 慶快を妨げずもし、さもなくば きつと一切處に眼をつけて見よ わからぬことは無きぞ

頌に曰く 路に達道の人に逢はば 語黙を以て對へされ 欄腰劈面に拳す 直下に會せば便ち會せよ

第二十三則 庭前栢樹子

頌意
この頌は全篇洞山初禪師
の語なるを今無門老師の
こゝに引けるなり
意詳言に及ばず

趙州因みに僧あり問て曰く 如何なるぞ是れ祖師西來の意 州云く
庭前の栢樹子
道の僧西天二十八祖の特々と漢土に渡りて 少林山下に面壁して 坐
したのみ、じやかど 遠くろの西來の意旨を問ふた 趙州思量拏排に
及ばず 便直に曰く 庭前の栢樹子
さあ、こゝが わかつた以上は 釋迦もいらぬ彌勒もいらぬ
頌に曰く 言事を展ること無し 語機を投ずることなし 言を承る
ものは喪し 句に滯るものは迷わん

第二十四則 達磨安心

達磨面壁し二祖雪中に立つ 臂を断て云く弟子未だ安んぜず 師の
安心を乞ふと 磨曰く心を將ち來れ汝がために安心せん 祖云く心
を免るに了に不可得なり 磨曰く汝が爲に安心し畢りぬと
なんと 齒缺け老胡 十万里海を渡つて特々として來たが つまり

頌意
西來して直指人心と説て
無事に事を生ずることば
二祖に付屬するに因て起
る道の事を以て叢林古今
の人をさわがするこゝは
元來爾より始るぞと云ふ
意

風も無いのに浪を起したのである 死にぎわに一人の弟子を、こしら
ゐて かつたわものにしたわい 畢竟とこで安心したのか さあ眼さ
きへ物が、ちらついては、わからぬぞ
頌に曰く 西來直指の事は囑に因て起れり 叢林を撓語するは、元來
是れ備なんじ

第二十五則 首山竹篋

頌意
和尚竹篋を拈起して活殺
の命令を下した
背觸に涉れば殺さむ涉ら
れば活す、これには佛祖
も命乞をせねばなるまい

首山和尚竹篋を拈して衆に示して云く 汝等諸人若し喚て竹篋とな
さば則ち觸る 喚て竹篋となさざれば則ち背く 汝諸人且く道へ 喚
て甚麼とあさん
さあ首山和尚は妙あることを問はれたる 竹篋と云へば竹篋の名に觸
れたる 竹篋と云はざれば竹篋の用に背くぞ 有語は觸れ無語は背
く さあ學人速に道へ 速に道へ
頌に曰く 竹篋を拈起して殺活の令を行す 背觸交馳佛祖命を乞ふ

雜說

○開悟

開悟

無隱禪師曰く——見性成佛是れ祖意たゞ禪に膠し定に漆す寧そ旨に契はんや單傳の一訣如何と問はば 祇た看よ如意は元と是れ鐵
——と
如意に膠する莫れ鐵に漆する莫れ 膠漆は疔瘡の頑疾たり 本來の面目坊の奥ふかく病室に閉ぢ籠るは 頑瘡の膠漆病の爲たり 如意が鐵 鉄が如意 別に仔細なき所 是れ面目坊の面目なり 病氣の爲には瘦もし また肥満もする 黄面瞿曇老婆親切に之を救わんとしたが 其劫來遺傳の疔瘡性なるに 驚き呆れ 此は一と通りあらぬと ひまやら山に躍り入り 八万四千の藥劑を買ひだし來て 應

本來面目坊

八万四千の藥劑

熱鐵丸

成佛

栢樹成佛

病與藥の専門札を掲げゝる 元とより看板に詐り無し 黄面老子自ら永の病瘡を拂療し 十二月の十一日菩提樹下に目出度床揚げを、おしたり 祝ひの赤飯は熾々たる熱鐵丸 齒もあてられぬ中に 金色の頭陀涎を流し 二祖臂と取り替へ 六祖米と共に搗き碎きぬ 噛み損ねば齒を碎き 呑み損ねば喉を破る 熱鐵丸畢竟これ何ものぞ 往て無隱に問へば 曰く如意は元とこれ鐵

如意の鐵、鐵の如意 如意が鐵か、鐵が如意か 鐵の火著あり 紫椹の如意あり 如意か 鐵か 白馬馬に非ずと譏語すること勿れ 如意が鐵 鐵が如意 開悟と謂ふは是より外にあらず

○成佛

僧あり問ふ 栢樹還て佛性ありや否 趙州眞際大師對て曰く有り 僧曰く栢樹何れの時か成佛する 大師云虚空の落地と待つ 僧曰く虚空何れの時か落地する 大師云栢樹子の成佛と待つ

道元禪師曰く――虚空の落地を待つとは有るべからざることを道ふにはあらず。栢樹子の成佛する度毎に虚空は落地するあり。その落地の響かくれ、さること百千の雷よりも過たり云々――
楞嚴經に曰く――一人眞を發して元に歸すれば、此の十方虚空悉皆消殞す――

法心成佛
法心禪師は俗名平四郎眞壁の郡主に仕へ、後沙門となり外航して徑山の無準和尚に參じ道を得て皈り圓福寺を持住す

東坡成佛

妖怪狸の成佛

是れ東坡居士の成佛なり。虚空落地し心身脱落し、落落するも六六原來三十六顔面舊に依て二眼一鼻、もし成佛に不思議あれば、成佛は妖怪狸の成佛のみ、成佛斯の如し。

不動智

六窓一猿
意馬八衢

○不動智

六窓一猿、意馬八衢、何れの窓にか頭を出し、何れの衢にか途草を喰ふ。右あらざれば左、左ならざれば右、右より左、左より右と首を出さずに居られず、途草を喰はずに居られず、いざと云ふ機あわて、窓より首を抜き取り、途草を止めて、さて何れの窓より彼の衢に行んと、噪々頭は、もはや事は済みぬべし。凡夫の心、皆纏つちの性を稟けて、右に左に前に後に何れにか粘着せず、あるとなし、粘着するは畢竟奪はるゝなり、鳥に奪はれて驚を忘れ、窓に奪はるれば鳥を忘る。朝より午、午より夕、何よ、かよ、うれよ、此れよ、と、意馬八衢を馳せ、猿頭六窓をのぞき廻り、この心は毎に常に奪われ通しなり、奪はれ通しなるが故に、この心は毎に常に忘れ通しなり、世尊は痛く之を叱却し給ひき、こゝには、さすがの須菩提老漢も困り果てしか、世尊よ、この心は

金剛經

如何にして降伏すべきや 又如何に其心を住すべきやと問ひしに
世尊は相を離れねば降伏はできぬぞ 應に住する所無くして而も其
心を生ずべしと 示し給ひき

諸相が眼の前に、ちらつき この心は是に奪はれ 翫は益す其の粘り
を強めて 到底降伏は覺束なし 若し、この心が諸相に奪はれぬ、とき
は この心は住する所無し 而して 權助と喚び オーと諾へ 座
が飛だ ハツと目を閉づる 疑慮按排を離れて當意即妙の處 是れ
住する所なくして而も其の心を生ずる底なり 無住と云へど 猿の
居眠りにあらず 六窓の中に猿が居眠りを爲し居らば 犬の窓より
獲し入るも知るを得ず 權助、オーの當意即妙の 現るべからず 六
窓内の一猿は何れの窓にも頭を出さず 何れの窓にも心を奪はれず
して六窓を守る、六窓ともに心を奪はれざるが故に六窓ともに忘れた
る窓はなし 南の窓より餅菓子をはい、北の窓より密柑をはいと 當
意即妙 うろたへる、こともいらぬ、あわてることもいらぬ 之を不

當意即妙

注意と油断

動智と謂ふ
翫先生路を歩む 空に心を奪はれて大地を忘れ 古井戸に陥入て膽
玉を消し 愕て大地を睨み大地に心を奪はれて鴨柄に頭を打却す
おはて、上を視れば下に敷居に厥く 畢竟注意は油断の親にして油
断は注意の影法師なり 一方の注意ますく、深ければ 他方の油断
いよく、深し されば油断すれば注意に墮す 注意すれば油断を生
ず 注意すべからず油断すべからず 亦油断すべからず注意すべか
らずと注意すべからず 是れ不動智の訣なり 七朝國師曰く 無
用心の處是れ諸佛用心の處あり

○歌、俳諧と禪

遍正が無住心上に 忽如として西大寺のほとりの柳 ろれよ、オーと
不動智の働はは 浅みとりいとまりかけて白鷺を

歌俳諧と禪

玉にもぬける春の柳か
惟禁裏の舞樂の、その乙女 其様は眼に入りぬ 心は網にあらざり
き 筆執ればはや軽く妙なる三十一文字は出来たり

天つ風雲のかよひ路吹きとじよ

乙女の姿しばしとめん

歌よまん人は知る 那邊這邊の思慮按排には 妙句の出でしためし
なきものぞ

頼阿が所眼 筆に移るも電光石火

雲消てみどりにはるゝ空みれば

いろこそやがてひなしかりけれ

彼よ此よと心粘り纏めては 天真の妙趣目さきにちらつくも知るこ
とを得べからず 殊に俳句の如きは 權助、オーの當意即妙に 妙機
を存せ 右を見て

やがて見上棒くらわせん蕎麥の花

林檎

左見て

蒲英公や誰が草臥たまりのあと

ボカン ア、

古る池や蛙飛びこむ水の音

思路按路にまごつく人の心には 樹上の魚思もよらざる、ことなるべ
し。こはこれ皆 不動智の活機に得來るにあらすして何ぞ 心之に
奪はれず 心之により添はず 奪はれず、より添はざるが故に 如何
ある妙處も亦天趣も、この心の中に見ゆるはなし 如何なる天趣妙
處にも注意なきが故に 如何ある天趣妙處にも油斷なし
松尾老杖つき坂に落馬して 心は馬にあらす 坂にもあらす 我に
も在らず 彼れにも在らず 只其機は 胸に浮みて

かちならば杖つき坂を落馬哉

眞面目にひづかまゝ議論を、あやつるに及ばず 歌俳諧の極意は 只
應無所住而生其心の一句あり 歌俳諧と禪の親しきは 天趣妙雅に

天趣妙處

心を奪れず 心が天趣妙雅を即攝するにあり 當意即妙の不動智が同じきによる 徒に無常風感を以て似たりとなす勿れ 古人云 あやの言葉は涙なくしてはかなぬものなりと 涙も心を奪れての涙は 硝石が磨の涙なりかし、心が奪ふての涙には 誠のあわれの、ねうちあることぞ 詩も文も其極意に至ては差ることなし 若し是を疑ふものあらば 疑國場裏懸岸に手を撒し 大死一番杜子樂天に買して見よ

○膽力と禪

○擊劍と禪

一切森羅万象に心を奪れず 一切事情に心を左右せられず 是れ禪の膽力なり 劍法の極意は 敵の打込むべき閑處なきなり 敵を打つべき隙に電光石火に應ずるなり 是れ禪理の秘要たり 曲さには別に拙著あり 膽力養成法附擊劍と禪理と云 就て覽るべし

禪の膽力
劍法の極意

美術と禪

○美術と禪

美と謂へるに幾界もあるべし 馬の美は馬だけの美にして 人間の美は人間だけの美あり 學者の美もあるべし 商人の美もあるべし 耳の美もあるべく 鼻の美もあるべし 青黄赤白の美あり 古びたる垢だらけの美あり 美の標準は視るものゝ心に定り 視るものゝ思想に異る しかれども美に上下なしとは謂ふべからず 下賤の陋心あれば 高尚の眼底あり 下賤の美は下賤にして 高尚の美は高尚をらざるを得ず 權助が所見の美は 直那が所見の醜たるあり 吾人々間の美は 人間以上の所見の醜あるやも知れず 兎も角も 高尚の美ほど高尚の美を知るべし 禪眼は真如の源底に透徹して 妄執なきが故に高尚の極なり 是の眼には斯美の極を即攝すべし 佛教の美は惟これのみ 禪眼は物に奪はるゝこと無し 奪はれざるが故に偏寄なし 偏寄の

筆外の風色

美は我が子の美なり 凡夫の美は大既に親の慈目ほどの美たり 他人は障子の蔭に指して晒ふべし
美術と云ば美の手ざわなり この心この行爲となり この心この技となる 技行爲は心の影法師なり 猫は鼠の影法師をなさず 三角の物を燈に映して四角の影法師を得んとするは 今世大概の美術師あり 畫工のこゝを描きこゝを塗る 筆は軽く染に澤あり この位のこととは提灯屋も作しうる處なり 其筆跡と彩色との上に おのづから現るゝ風色は 直に其心の名刺あり 猿のやうな心には 猫の風色は免むべからず 彫刻にせよ何にせよ 皆この一事は差ることなし 美術と禪と親しきこと茲にあり

武勇と禪

○武勇と禪

禪は歌文俳諧と親しと云ふより 柔弱なるものゝ如く想へるやからもあり 大勇は童女の如し 天龍川の西行は高雄の庵室に往きし西

練心

行なり 見損ねること勿れ うれ勇敢とは決断の謂なり 決断は意力の決行あり 意力の決行にはいつでも情識（オホキミナリ）の彌二馬があらわるゝものなり 彌二馬の顔にひかされて 右を左左を右と迷ひ漂て 結局仕損じとなり憶病となる 禪の心を練るとは意力を練るなり 意力を練るは意力を強ふして智情（チキョウ）に奪はれざるを要するなり 如何なるか是れ柔弱と自ら省みて見よ いつもく情識安智の猫兒がしやれづきて いざりがちと爲るを知らん 山河大地森羅万象是れ自己と云ふ 見識には 手強い手弱いの沙汰は無用あるべし 精進勇猛とは何事ぞ 心を動せず心を乱さざる底なり 是れ禪の姿なり もしての心柔弱不精進ならんには 即ち森羅万象に勝手次第に奪はれて この心は森羅万象の小遣ひ奴となり 一生の間うき世の食客にて終るべし

浮世の食客

眞理と禪

○眞理と禪

唯一心

真理と云へば悉く皆真理あらざるは莫し。妄理ならば此の世界に有るべき筈なし。此の世界に無きときは之を知るものもなかるべし。然らば真理と妄理との名は何れから生れ來りたるや。

見よ。山河大地は古より山河大地にして、森羅万象は昔しより森羅万象たり。一に一を加へて二とあり、進めば近く退けば遠し。然れども西行には富士が面白く見へ、田舎の婆には有難く見へ。曾我の兄弟にはうれしく見ゆ、進むも前からすれば近く後からすれば遠し。渴したる權助は水が甘く、飢たるおさんは飯が甘し、飯が甘きか、水が甘きか、魚は人の水外に在るを奇とし、人は魚の水中にあるを奇とす。水中が奇なるか、水外が奇なるか、猫は小判を棄て、鯉節を取り、小僧は鯉節を棄て、小判を取る。小判が好きか、鯉節が好きか、小僧鼻をうごめかして小判の好きを言張るも、猫に論あり、小僧の説に任すべからず。おさんの真理、權助の目には妄理にして、權助の真理、おさんの目には妄理たり。おさんが真理か、權助が真理か。

哲學と禪

雷同の多少を以て判すること莫れ。おさん十人、權助一人にてお三、真理ならば、權助十人、おさん一人にて、權助真理なるべし。十指の指す所十目の視る所それ嚴なる哉とは、お互に仲間通しの申分ありける。

若し這裡に於て斷言して、誤らざらんことを欲せば、宜さに我と我所との差別眼を打破し來るべし。おさん權助ともにこれ真にあらず、妄にあらず。洞然として蛙鳴蟬噪のみ、到底真理の詮索は死後再蘇底の漢にあらざれを覺束なし。真理と禪、かくの如し。

○哲學と禪

昔は、テールス水を背負ひ、アナキメニスメニスは空氣を捕へ、アナキサゴラスゴラス小刀細工を加へ、ピサゴラスゴラス之に反對し、頭頭聲出し、ソクラテーステースの起るあり、アリストートルトルの出るあり、近くはスピノザノザ實體學の店を擴げ、ベルギユギユリーとカント及びフイフターフターは唯心の

商（カウチヤ）に商賈（カウチヤ）職（カウチヤ）仇（カウチヤ）きの競争あり。ヘーゲル絶對即の專賣をなし。コン經練派の廣告と布き。スペンセル進化哲學の看板を掲ぐ。古くは印度に九十六軒の外道町。黃面老子の商店あり。孔子は客觀的に天地を擔ぎ出し。老子は主觀的に現象を擔み退け。莊子謳ひ。揚墨囀る。八轉び七起き。七轉び八起き。物心二つを引づるあり。心一つを抱へるあり。非物非心を叫ぶもあり。物心同躰を叫ぶもあり。何れも已れだけは絶妙の高論として疑はず。中に就て黃面老子の商店は。其餘外の學派一切の所説を拂底論却して更に百尺竿頭何は一步を進めて。學無學の外に出で默語の二を離れたるなし。道をも究めたり。禪即是なり。

世の所謂哲學は。漸く鍛冶を経て今日に至るといへども。猶ほ是れ學齡生徒の分際たり。若しも其哲學が。無上世界に卒業して目出度合格免狀を受け取る時は、いさ知らず。目今世界の教場に二本棒を流す哲學の相場に禪門を照らして。時宜によりては其生徒仲間にもさ

んどするは。以ての外のことなりかし。一と通り二た通りの所にては。ヘーゲルの胸算（カウチヤ）スペンセルの筆さきにも合すべけれど。そは盲者の芝居見物程のことなり。水を飲むもの冷暖自知すと云ふも。これずでに緩にして緩なり。然れども講ずる所は悉く、これ哲學たり。參ずるも亦悉く哲學に屬すと謂は。あゝ禪も亦一種の哲學なるか。もしさあらば。哲學より余程の謝義を取るか。賂を取らざるべからざるなり。

禪學示範終

明治廿八年五月五日印刷
明治廿八年五月十日發行

定價十元

編著者 市川文雄

神奈川縣橘樹郡中原村
大字新堀貳百七十番地

印刷兼發行者 今村金治郎

東京市芝區露月町
十番

印刷所 北澤活版所

東京市京橋區中橋和泉町
一丁目

發行所 鴻盟社

東京市芝區露月町
十番



豫約出版廣告

千丈禪師著

再刊 幽谷餘韻

和紙大本三十卷
紙數千五百枚
定價金六十圓
郵税金六十錢

●豫約申込期限 本年五月三十日限 ○豫約五

●圓 返送貨 弊社持

●製本出來 六月三十日 ○は定價に復す ●但し前金に限る

千丈實嚴禪師の洞上に於ける絶代の博識曠世の文豪たる普く世人の識る所にして其の筆法雄健にして游龍の空に盤りて端倪すへからざるか如く其闡義幽深にして燃犀の水を照し微として燭らざる無きか如し獨り天柱、面山、指月、玄樓等の諸老の上に卓越するのみならず大典、六如等の名匠と雖も殆ど軒輊する所なし嘗

禪師一代の著に係る語録、詩賦、傳記、書序、題跋、贊、雜著等無慮數百千篇を蒐めたるものにして實に禪門の好文範なり特に洞上門下の諸師に在りては虞時法式に於ける香語宜疏等の軌範として一日も座右に缺くへからざるの良書なり舊本は享和年中の刻に係り頗る缺損する所あり今や坊間殆ど完本を存せざるに至れり弊社斯る寶典の湮滅せんことを憂ひ茲に再刻に附し豫約法を以て普く江湖の高僧に應せんとす大方の諸士此の好機を失はず速に豫約購讀あらんことを乞ふ
曹洞宗務局御檢閱濟

●訂正洞上諷經錦囊 全

●木版美刻、折本堅七寸、横三寸日本厚紙兩面摺

●釋尊○承陽大師○圓明國師の三尊像入 ●日分行持○月分行持 ●年分行持

諸回向類 ●諸宜疏類 ○可漏法 ●夏冬制中行事 ●二時粥飯念誦 ●尊宿葬法 ○在家葬法 ●梵唄偈 ○甘露門 ●大悲呪 ○消災呪 ○尊勝陀羅尼 ○寶篋印陀羅尼 ●心經 ●舍利禮文 ●參同契 ○寶鏡三昧 ●信心銘 ○證道歌 ●壽量品 ●安樂品 ●普門品 ●楞嚴咒 ●金剛經 ●佛遺教經

●坐禪儀○坐禪儀●發善攝心○發願文●修證義
 本書は曩に明教新誌其他五六の雜誌へ廣告せし弊店
 出版の洞上行持經錦囊にして曹洞宗大本山の檢閲を
 得て御認可を蒙りたる誠に千歳不磨の寶典にて且つ高
 祖大師の發願文を重刻して之を卷尾に付したれば其全
 璧にして毫末の瑕玼なきとは勿論活字版西洋紙を以て
 版行する粗漏のもの同日の論にあらざる況んや弊店の
 出版は大本山の檢閲を経たるものなれば公然揚言して
 洞上不可欠の寶典と云ふも敢て誣言にあらざる然れども
 天下の廣き江湖の遠き或は誤りて不完全なる出版物を
 購求せらるゝが如き不幸に遭遇せらるゝとなきにしも
 ありざれば弊店は勤めて親切なる校正を加へて寶典の
 名に背かず大本山檢閲の高恩に酬ひ以て洞上僧寶各位
 の高需に應じ既に三版數千部發賣致したるも是れ一重
 に弊店が言を食はず利を射るに非ることを諒せられて
 斯く各位の御愛顧を蒙りたる事と日夜感佩罷在候依て
 今回左の大特別を以て發賣し從來弊店か各位に蒙りた
 る道念に答へんと欲す請ふ陸續御注文あらん事を

大特別減價

●並製紙表紙紙入金六十錢郵税金四錢

- 觀音靈驗記 全五冊 正價金六十五錢
- いろはの義解 全 郵税十四錢
- 佛教信徒の心得 全 二錢
- 因果の枝折 全 二錢
- 佛遺教經通俗講義 全 二錢
- 碧岩耳林抄 全 六十八錢
- 大會一覽並紀行 全 二十八錢
- 各國宗教部 全 六十二錢
- 行誠上人法語集 全 四十六錢
- 慈雲和尚法語集 全 四十五錢
- 芽くみの露 全 四十五錢
- 佛誕生會講式 全 四十二錢
- 人天佛教 全 二十二錢
- 教義問辨 全 二十二錢
- 佛教道德の要領 全 二十二錢

- 冠註百法問答抄校本 全五冊 九十四錢
- 冠註華嚴原人論 全 六十八錢
- 冠註入阿毘達論 全 六十六錢
- 冠註六合釋講義 全 八十六錢
- 冠註因明入正理論科註校本 全 二錢
- 冠註唯識廿論述記 全三冊 四十五錢
- 冠註信心銘夜塘水 全二冊 八十五錢
- 冠註金七十論備考會本 全二冊 六十五錢
- 冠註普勸坐禪儀 全 八錢
- 冠註坐禪用心記 全 二十三錢
- 冠註傳心法要 全 二十二錢

校註維摩經日講左券

正價金六十錢郵税金六錢

右は維摩經註疏中最も有名なる著書にして古今學佛者
 の重寶とする所なり然るに舊本は已に滅版に屬し坊間

●維新僧月照傳 完 定價金二十錢 郵税金二錢
 明治中興の日に當りて此大業を助けたるもの世間實に
 多し然れども師の右に出るは甚だ稀なり師は政事上條
 概の豪傑として宗教上挽回の棟梁として實に後世の模
 範たる可は世既に之を知る又喋々を要せざる也殊に馬
 場先生流麗の筆之に大筆の櫻痴居士が潤色されたる者
 なれば又文章の模範として相學ぶに足れり請ふ速に一
 本を購ふて世出世の豪傑たるぞ知れ

謙翁道話

全一冊 定價金十錢 郵税金二錢

本書は明治時代心學者の泰斗として推尊せられたる三
 谷謙翁居士の遺著を川尻實峯居士の校訂せられたるも
 のにして演說々教をなすの各位は一日も坐右に欠くべ

IT-35-60

からざる参書なり

高城慈雲尊者遺稿 釋安照律師序并関

訂正 金剛經講解 全壹冊 頗美本

正價金三十五錢郵稅金四錢

金剛經の注疏は和漢諸名匠の手になるもの其數枚舉に
送わらずと雖も或は繁に失し簡に過ぎ強て穿鑿を加へ
應酬を加へて經意を邪解す是を以て學者皆な其方に迷
ひ未た之れか精微を盡すこと能はず獨り高城慈雲尊者
に至りては學古今を一貫し徳四表を兼ね其見解亦た宋
元諸師の上に出ること遠し况んや尊者の金剛經を講解
せられしは佛敎を一括して餘蘊なく其說妙にして精。
簡にして盡せり今や弊社此の遺稿を得たれば雲照律師
の校閱を経て之を梓に傳するの幸に遇ふ荷も佛理を領
し佛敎の津渡を知らんと欲せば此書に如くものなし請
ふ一本を購讀して弊社の言の理ひざるを知りたまへ

故學師々師題字

●觀音講式 折本全一冊

正價金十二錢 郵稅金二錢

本書は海蔵寺藏の講式本を今般同寺と示談上關取發
賣す仍て陸續御注文の程奉希望候也

加藤祐常師著

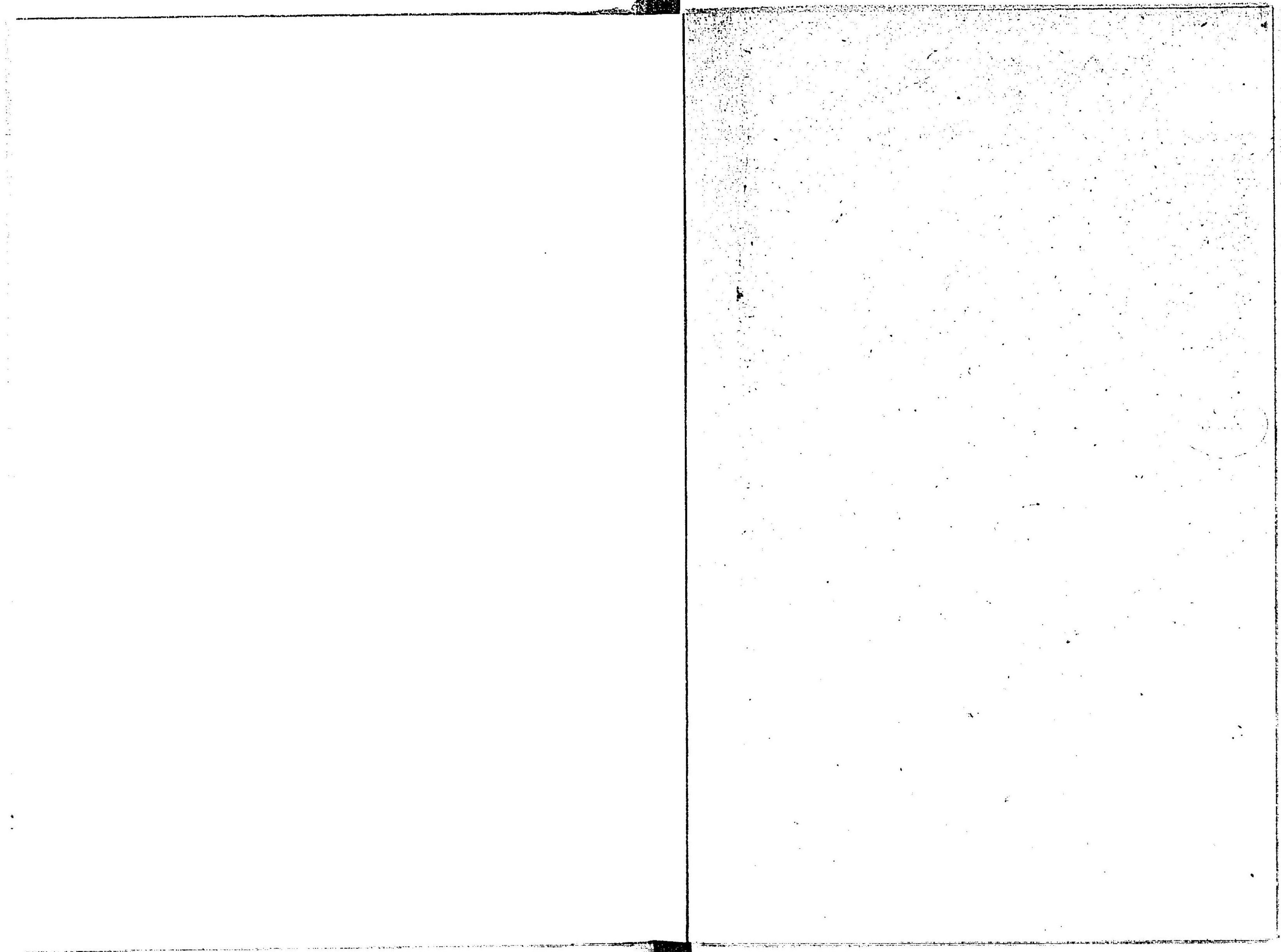
●三國歷史問答案 洋綴全

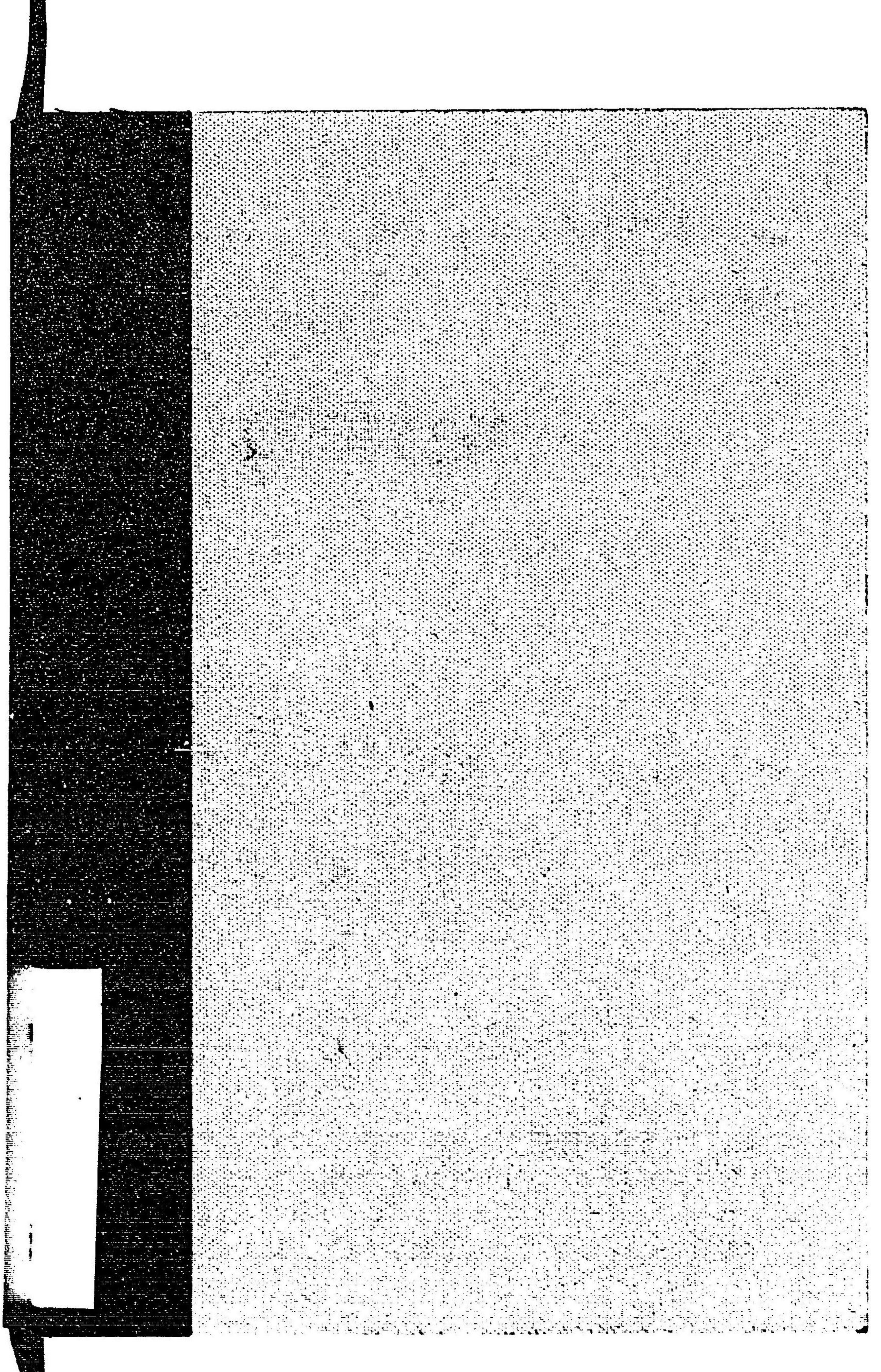
定價金十五錢 郵稅金二錢

本書は會て島地默雷織田得能の両碩僧會て三國佛敎略
史なる者を編纂して之を公にせり故に曹洞宗學林は之
を其敎科書に充て、生徒諸氏に研究せしめらるゝも如
何せん同史は實際に於て其短所あるも長所に乏しきや
具眼者の知る所なり然るに道回加藤祐常師一大奮發
以て此書を編纂し弊店に命して之を出版せしめらるゝ
に至る世の佛學者諸氏幸に一部を購讀するむらば忽ち
にして佛敎の三國に傳播せる疑團を氷解するに近から
んと謹て言す

東京市芝區露月町十八番地

佛教書肆 鴻 盟 社 敬





40
158

禅学示范

国立国会図書館

019596-000-0

40-158

禅学示范

市川 文雄/著

M28.5

ABG-0370

